標註梘草紙讀本

五

標注枕草紙讀本目次

巻五

さゝぐ〳〵き物　一丁　ふいがしろなる物　一丁　詞なめげなる物　一丁
さか〳〵きもの　一丁　上達部ハ　二　公達ハ　二
法師ハ　二　女ハ　二　宮仕へ所ハ　二
天人ハかりやと見ゆる物　三　雪ふる日　三　殿上人　四
たゞもきふ過る物　四　殊ふ人よられぬ物　四　赤衣着たる児　四
ほゝ〳〵きすの歌　四　うぐひすと郭公　五　稲苅るさま　五
いみ〳〵くきたふき物　六　ゆめて恐しき物　六　頼も〳〵き物　六
人の心もちひ　六　うもゝ〳〵きもの　十　積善寺の供養　十四
たふとき物　廿一　歌ハ　廿一　さ〳〵ぬきハ　廿一

九曜文庫

かりぎぬハ　三十一
下がさねハ　三十二
神ハ　三十三
時奏する　廿三
玉づさ　廿八
香爐峰の雪　四十一
暮しかねける　四十二
ゝやづかへ人　四十四
右衛門の尉　四十八
げもん歌謡ふ　四十九
ふどの　五十一
ひとへハ　三十一
扇の骨ハ　三十二
崎ハ　三十三
成信中将　三十四
きらゝしき物　四十
陰陽師の許なる童　四十一
こゝなる長居　四十三
見習ひする物　四十五
斧の柄　四十八
げもの人ほむる　四十九
女親なくなりし男　五十一
ところき物ハ　三十一
檜あふぎハ　三十二
屋ハ　三十三
兵部　三十四
火桶の火　四十
柳のまゆ　四十一
凛々として氷鋪り　四十三
打とくまゝき物　四十五
いよゝ見まく　四十八
大納言殿　四十九
定澄僧都　五十二
とほつあふゝ　五十三
裳ハ　五十四
紋ハ　五十四
心づきなき物　五十六
工匠の物くふ　五十八
うしかひ　六十
ものゝけ　六十一
枕ゝこそハ　六十五
はゝ井　五十三
かざみハ　五十四
衣の着様　五十四
いひふくき物　五十六
物がゝりせよ　五十八
獨ぎゝする人　六十
やごとなきおぼえ　六十四
唐衣ハ　五十四
織物ハ　五十四
やまひハ　五十五
男女の品　五十八
有明の月　五十九
清げなる人　六十一
見苦しき物　六十四

標註枕草紙讀本目次 大尾

佐々木弘綱標註

さゝぐしき物　二百六段

たゝり火、おき炭など亦火するをいへり。

ときのさバくふハ、齋の產飯を屋根ふうちあげゝをあらそひくふをいふ。

十八日清水ふハ、世ふ觀音の日を十八日とするゆ、昔妙觀といふ人、勝尾寺の觀音を十八人して、十八日ふをしめ、望月十八日ふ刻ミ終りて、其日ふ皆失せたるゆり、國俗十八

たゝり火　板屋ぬうへふてかゝらぬのときのさバくふ。十八日、清水ふこもりあひたるくらう成て、まゞ火もとゝもさぬわどふ、わりくゝより人のきあつまりたるゝまゝてとわき所、人の國なゝゝより、家のぬゝのひゝぐりたるいとさとゞゝ。ちらきわゝふ火出来ぬといふ、さまゝど燃えハつゝざりける。物ゝゝてゝ、車のかゝりさとゞわど、ふいゞゝろふる物　二百七段

日を観音の日といへるゝし。元亨釈書ふ見えたり。

からゑの葉の葉ハ。唐繪をまきゑふしたるをいふ。

ひゞりのふるまひハ。遁世の聖ハ。聊も世ふへつらふ心なくふるまふ。ふいかーろなるを云。

宮の紗ハ。巫祝の類なり。されハ神ふふれて。生霊文ゝむ詞。おのつゝら人ふ乞れのゝあるゝや。

かんなりのちんの舎人ハ。近衛の将監以下府生衛士等をいふ。此頃近衛の陣

女宮どものゝみあげたるすゞた。　からゑのゝその葉のうーろ。ひとーまのふるまひ。

ゐなめげなる物　二百八段

宮のめれさいもんゝむ人。　舟こぐ者ども。　かんなりのぢんれ舎人。　すまひ。

ちゝーき物　二百九段

いまやうのみとせご。ちごの。いのりそらへなどする女ども。物のゞこひ出て。いのりれ物どもつくるふ。紙あまゝおーゝさぬて。いとふぶきゝたなしてきるさま。ひとへゞふさつべ〳〵もえぬふ。ちる物のゞと成ふゝれば。おのゞ口をさへひきゆゞめておーゝきりめおゝゝ新物ども去でかけ。竹ゝちきりなどーていとかゝぐ去ゝ去てくゝちふるひいのるゝどもいとさゝーかついつ何の宮れ其殿の若君いこどゝおをせーをゝいのごひたるやゝふやめ奉ーゝば。ろくおゝくぬをーゝ。乞人ぐめーたりゝれど去るしもふゝりゝれば。今ふ女をゝんめす。ロとくをえるゝなどかたるもをゝーし。げものゝれ女あるゞ。去きたるゝのそひーもをゝーまことふさゝーきゝ人をおーゝふどすゞーし。

上達部ハ　二百十段

牙。威勢ふよりて河毎乞れなるゝゝありしふや

すまひハ。七月相撲の節とて禁中ふあり。其相撲人をいふ。皆力者なれば。人を軽し毎乞れなりしふるゝし。

物の具こひ出ていハ。殺の具ふすべき残麻なゝの類を持出るをいふ。

おのゞ口をさへ云云ハ。頓き力ゝて。力をいれてゝちきるさまをいふ。

去ていハ。垂也。木綿四手をされゝくる也。かつハ云くハ巫女の自賛のさまをいへるなり

いみじうおもせし
い。いとく炊ひめひ
しをいふ也。
其人くい。うの陰陽
師。この巫女なと召
されしうとの意也。
今ふ女召すい。我ゑ
をいつるなり。
はとくをゝるい。は
陰を見るの意也。
たれたるものそひ
しい。愚痴なる男ふ
そひゐさる也。
おーなとすべしい。
賢き男をも押して。
さうーかるさまを
いふなるべし。
上達部い。公卿をい
ふなり。
左右大将い。左右近
衛の大将也。
宰相中将い。参議ふ

春宮大夫。　左右の大将。　權大納言。　權中納言
宰相中將。　三位の中將。　東宮權の大夫。　侍
従宰相。
公達ハ　二百十一段
頭辨。　頭中將。　權中將。　四位少將。　藏人辨。
藏人少納言。　春宮のすけ。　藏人兵衛佐。
法師ハ　二百十二段
律師　内供。
内侍のすけ。　二百十三段
女ハ　ふいし。
みやづうへ所を　二百十四段

て。近衛中将を兼たるをいふ。
公達ハ執柄大臣なとの息をいふ。華族
とも清華ともいへり
頭弁い。藏人頭ふて弁官を兼たるをいふ也。
四位少將い。相當正五位下なるふ四位ふ叙して其まゝある也。是を叙留といふ。殊恩ふうるものなり。
藏人弁ハ。五位の藏人ふて弁官を兼さるをいふ也。
律師ハ。五位ふ准する僧官也。
内供い。内供奉ふ同し。

内。　后宮。皇后をいふ。　一品の宮。　高内侍ハ
つみふゝくれどをゝし。　まーてこのけをめで
たし。　春宮の内侍。母女御。
身をかへて天人なとをかうやあらんとみ
ゆるもの　二百十五段
たゞの女房ふてけぶらふ人の内めのとなり
さる。からきぬもきず。裳をだゝ用意ふくそくぎ
ぬふてはまへふそひふして。内侍のうちをゐ所
ふして。女房どもをよびつゝひ。つぶねよおいひ
や里。文とりつゞせふどーてあるさまよ。いひつ
くせべくざまあらぬ。　ぢふたきの藏人ふ成た

内侍すけハ、典侍ふて四人相當役四位、尚侍ふつける女官也、

ないしハ、掌侍ふて相當役五位六人也、内ハ、禁中をいふ、一品の宮ハ、内親王の位ふなるべし、

高位ハ云々ハ経佛をも忌〻て中子染紙なといへハなるべし、

まして此頃ハ、清少納言の頃ハ、大高位として、選子内親王きこえさゝくおはせし故なるべし、

位ふふ云々ハ、后宮女御なとの御前ふて、見ふそひふしゐるをいふ也、

る、めでたし、こそのき月のまんドの空ふ、みことも、たりし人ともてえば、公卿ふつゆとてあまくい、いづくなりし人ぞとこそおぼゆゆ、外ふりなりたるなどハ、おなじふなれども、もおぼえば、

雪ふる日　二百十六段

雪たゝう降て今も猶ふる、ふ、五位も四位も、色うるハしゝう者やうなるゞ、うへの衣の色いときよらふて、かたのおびのゝたつきたるを、とのゐ生ゞふひきたこえて、紫のち、ぬきも、雪ふそえて、こさまさりたるを着て、おこめのゐならびハ、おどろ〻ゝきき山吹を出して、からゝさをち、さつぶねふハ、我局ふ用ゐをいひやる也、

さうゝきの云くハ、藏人所の雜色なり、本負ハ人皆藏人ふ轉るものなり、

ここともゝうしハ、賀茂祭時然ふ所の雜色ち琴を弾くゐあるなり、

外ふりなりたるハ、雜色ならて、外の人の六位藏人ふなりたるをいふ、

むらさきの指貫もハ、袍衣ふ指貫なるハ、今衣冠といふ装束なるべし、

あこめハ、袖ふて袍の下ふ着るものも也、おとろ〻しき山吹ハ、色の花やうなるゞ、風のいさく吹てふこざまふ雪を吹ゝくれば、すこしゝさぶきてあゆみくる、ふゝぐつをうくゐなどのきいまで、雪のいと白くかゝ、ゐたるこそをゝしれ、

殿上人　二百十七段

細殿のやゐ戸、いとゝうおゝあけされば、清ゆどの〻めぐうゐりおりてくる殿上人のふえたるなゐゝち、ぬきけ、いさくかころびさきば、色々のきぬどものこぞも出さるをおゝいとなどして、北のぢんのうるさまふあゆゝ、ゐふ、ゐきたるやゐ戸のまへをすぐとて、えいをひきこして、ゐ

をいふ。山吹ハ表薄朽葉ふ重黄なるをいふ。
ふゝぐつをうくゝハ。深沓半靴なり。めたうハ。馬道ふて。掾つゝきのゝあり。えいを引こゝてハ。濱臣云。さしぬきふとのほころひしを。女房さちふ見あふとらをんゝをつゝしさふ冠の纓を顔ふおゝひて逼るふるゞし。
人のめおやハ。母をいふ也。
くゝゑふちハ。凶會日ふて月毎ふあり。暦ふさゝしちるぜれとさして忌憚らねばあるべし。

わふふさぎてすぎぬるもをゝし。

さゞすぎるすぐる拍　二百十八段

わあげさる舟。人のよハひ。　春夏秋冬。

ことふ人ふちらをぬもの　二百十九段

人のめおやの老たる。くゝゑまち。

赤衣着たる児　二百二十段

五六月のタゝさ。青き草をわそうゝ新たゝくきりて。おゝぎぬきたる児のちひさき笠をきて。左右ふいとおわくゝとちてゆこそ。ずゞろふをゝしゝれ。

わとゝ姫宮の歌　二百二十一段

折敷のやうなるおゝ云くハ。平ふて浅き笠なるゞし。

おきふすやうふてハ。田を植うるさまをいへる也。

郭公を里謡ふなけふうさふ也。
郭公ふ云くハ。其うさふ謡也。おれふハおのをふゝやつハ俗ふキャツといふ。
泊ふて。唯おのれといふすの重河也。さて謡の意ハ。郭公ふ。己のなきてそ我らハ田ふ立出て苗とるとも。
いゝなゝし人ゝハ下文義詳ふらず。仲

賀茂へまうづる路ふ。女どものあたらしきをゝきのやうなるおゝを笠ふきて。いと多くさてゝりて。歌をうゝさひ。おきふもやうふ見えて。只伏すともふくゝろざまにゆけど。いゝなるふゝゝらん。

をゝゝとふ。郭公をいとなあくうたふ。

郭ぞ心うき。わとゝぎすふおれふ。かやつふ。おきなきてぞ。われハ田ふとつとうさふふ。鬧もをてぞ。いゝなゝし人ゝいさくなきてぞといひ。

仲忠が童おひいゝでおどす人と

鶯と郭公　二百廿二段

鶯ふ郭公ハいおとれるといふ人こそいとつらう

忠云々ハ、宇津保物語の仲忠すゞしの優劣をいへる条の重出なるべし。
ちことも〻ハ云々ハ、児の夜泣くゝ〻ろしとも也。そハのは文字ハ助辞也。

さふへとりしゝ云々ハ、古今集ふきのふこそ早苗とりしういつのまふ稲葉そよふきて秋風のふくとある歌の意思ひ出て、けふと思へるなるべし。
やもげふハ、一本ふすけゝとあり。濱居云すけゝハ、健氣の意ゝといへり。
穂をうへふて云々ハ、稲の穂を上ふして持て田夫の並居るハ、何とてさやうふハするやらんいとをゝしとも也。
いゐりのさまハ、田を守る番ゐりことなるハ一本ふことなりとあり。
ふめくぢハ、蚰蜒ふり。
ゞゝしハ、合子ゐり。
さゞ物もおゐえねバ、あまりふおそろしけれバなるべし。
ずゐふハ、修法也。
思ふ人のハ、我夫ふ

ふくゝれ、嘗ハよるなゝぬいとわろ〳〵すべてよるなく拍ハめでさし、ちごどもぞハめでさゝらぬ。

稲うるさま　二百廿三段

八月つごもりゞ〳〵ふうづまさふまうづとてゐれバ穂ふ出さる田ふ、人おゐくてさゝぐ、稲ゝるなりけり。ちなく〳〵とり〳〵ゝいつのまふ、とえまことげふさいつごろ賀茂ふまうづとてゐしゞ、哀ふもなりふける哉。是ハ女もまゞらす、男のゝゝまにいとあゝまきいねの、ゝといまきをゝりもちて、かゝさふゝ伺ふゝらんゝとをきるさまのやもげふめでさきるふいとせまゐ〳〵くゐゆるや、いゝでさすらん、穂をうへふてなみをる、いとをゝ〳〵うゐゆ、いゐりのさまことなる。

いみゞくきたふき拍　二百廿四段

なめくぢ、えせ板敷の帚、殿上のゞうし、

せめておそろ〳〵き拍　二百廿五段

ふるなる神、ちゝき隣ふぬを人の入たる、我をむ所ふ入たるハ、さゞ拍とおゐえねど何とも去らず。

たのもしきもの　二百廿六段

心地あ〳〵きハ、俗あまゝ去てずゐふ去ゝる。思

との煩ひて便なき頃也。減ふ頼もしき人ハ其友さちなどなるべし。物おそろしきをり云くハ。幼き子ども女なとの両親の傍ふ居たる時の頼もしき心をいへる也。

ある人の云くハ。おのすからの世ふありし物語なるべし。いみじういひさはきハ。むこのあくさし心を恨むなるべし。まゞ〳〵しきすともハ。咒咀なとをいふなるべし。

ふ人の心地ゆしきは。まことにさのもしき人のいびあぐさめさのめたる。物おそろしきをりの親どものうさいら。

人の心もちひ　二百廿七段

いとゞうたてゝむこ取さるふいと程ふくすまぬむこ。されさるべき所などまそたちとまあひたる。いとゆしとやおもふらん。ある人のいみじう時ふあひさる人のむこふなりて。一月もすぐたちうもこでやゝふしゝうバ。すべていみじういひさはぎめのとなどやうのものをまゞ〳〵ふきすどもいふもあるふをかへる年の正月に藏人ふかゝるゆゝらひふいうでとゆゝ恨めしき中ふハ。いうて聟のさめ悪きすもあるかしと思ふふなと。姫ふどのいふを聟のきくらんとも。もうのうへの袴ハ。綾の表袴也。

忘れふし人の車の云くハうの見捨さる女の車の富尾ふ。男の半臂の綱忌緒の引ゝくらんなど近くゆさるとも。いゝふ見るらんハ忘られし女の也。

なりぬ。あさましうかゝるなゝらひふいうでとこそ。人ハ思ひためるなど。いひあつうふハ聞らんうし。六月ふ人のハ溝ふみひし所ふ。人くあつまりてきくに。この藏人ふなるむこれさうのうへは袴すもうゞさねくろもんひなどいゝどうのざやうふて。わもれふ人の車れとみのをふもんひの者ひきうけつバうりふてみさりしをいうふ見るらんと車の人くも。ちりたるかぎりハいとほしゞ。正しをこと人どもとぼれふくゆさりし。物哉ふど後ふもいひ。往男ハ物れいとゆしさ人の男もんすハ。ちらぬふめり。世の中

されてふ物狂ひ云云ハ、何さる狂人ぞ、さやうふ憎まれんとハ思てんとの意也。

ちぜんふハ、自然也。よき人の云くハ、是より釈兄弟ふ思てるゝうよきをいふなり

目ざち見さてられハ、釈なとふよく思たるゝ程の人ハ、他人も同ふさて見さてゝよき人といさたるとの意也。

見るゝひあるハふ、容色行跡もよきをいふ也。

ことなるなきハ、格別ふろしゝらぬをいふ也。

男こそ云くハ、是より男の女を思ふるふつきてあやしきるあるをいふ。

おそやけ所ハ、禁中をいふ也。

及ふましゝらんハ身ふ相應せぬよき人をも、美人と思てんをハ、強ても思ひゝけよとの意也。

女の目ふも云くハ、彼美人をすてゝ悪女をもつ男のあやしきをさちかへりいふ也。

ふ猶いと心うき物ハ、人ふふくまれんるこそなるべくれ、されてふおぐるひゝ、われ人ふさ思ハれんとを思ハんされど志ぜんふ、宮つゝへふふも、釈ちらからの中ふてを思ハるゝおもをれぬぐ何るぞいと侘しきや、よき人の出るハ更也げをなどのわども、釈などのゝなしうするふハめざちふたてられていをちうこそおぞゆれ、ふるゝひあるハ、ことをとり、いゝゞ思ハざらんとおぞゆことなるるふきハ、又これをゝなしと思ふらんハ、釈ふをバぞゝしと哀なり、おやふも君ふもすべてうちかさらふ人ふも、人ふ思ハれんバ

ゝりめでさきるすハあらゞ、男こそ怪いと有ぐくあやちき心地したる物ハあれ、いときよげふる人を捨てふくげなる人をもたるもなやしゝし、おそやけぞふいゝさちするをとこふの子などハ、あるぐ中ふよゝらんをこそハえゝて思ひめ、及ぶまゞゝらんきをぞふめでたしと思ハんを、志ぬべゝりもれもひゝれゝし、人のむめ、まぐふぬ人などをも、ふしときくをこそハいゝでともおもふなを、且女のめふもわゝしと思ふを思ふハ、いゝなるるふゝならん、ゝさちいとよく心もをゝしき人の、をもようかき歌をも

返すハさらしらふハ男の返事ハ賢けふまれと通をぬせ

おややけをらさちてハおのゝあつらぬ人の上のゝを傍ゝ見きゝて腹たゝしう思ふゝ也俗ふいふ法界ゝ法界ゝきの法界といふよくあるれり

けんぞくい眷属ふて女の親類までの意也

身の上ゝていゝ男の身のうへゝゝて也なけの何ハさして思ひ入れていをぬ詞をいふ也

あハれふゝておこせなどするを返すハさらしらふうちする拙ゝらゝりつゝずらうゝげふ打ふきてゝるゝをゝ捨ていきなどするを涉まうおややけ腹さちて々んぞくの心地を心くゝゆべ々れど身の上ゝてをつゆ心ぐるゝきを思ひをらぬふ爺のゝゝりも情あるゝハ男ハちらなり女もこそめでさくおゞゆれ扇げの何ふゝゝ切ふ心ふ掠くいらねど いとゝゝゝゝきゝを いとほしとも あハをなるをバ々ゝいゝゝ思ふらん あどいひけるをつゝへて少さるハさゝむうひていふゝも喜ゝいゝで此人ゝ思ひをり

いゝて此人ふ云くハ彼陰ことゝ情あり々ゝいひたる嬉ゝさを思ひ知りたりといふ程の心さゝを見せまゝゝく思ハるゝと也

とりわられゝもせすハ取分て嬉ゝとも美元子と也

さもあるまゝき人ハとひ思ふへき故もふき人をいふ

人のうへいふを云々ハ此殿ハ唯無ゝハ人の咎いふゝもあるを あゝきゝと奉下ゝ腹さつ人ハふゝなゝとのさせいゝてゝハあらんハ我身をおきて人

けりともえふゝゝがなどつをゝこそおゞゆを必思ふべき人とふべき人ハさるべきゝなれどとりわられゝもせぞ内もなるまゝき人のゝゝいらへをも心やもくたさるハうれゝきわざせいとやもきゝなれど更ゝえあらぬゝぞらし大ゝゝ心ふき人のまことゝかどなゝらぬハ男も女もありゞきゝなゝり又さる人をおゞゝるべゝ人のうへいふを腹たつ人ゝそいとわりふれいゝでゝハあらん我身をゝゝおきてさバゝりもどかゝくいゝまゝゝきゝやゝあるされどゝゝらぬやうゝもあり又おのづゝらきい

の咲をいひさき者ハいうてゝあらん畢竟空無なてゝひ出るなりと也。

されどゝ〜ゝらぬハ。併〜人の咲をいふハ。空無なゝらゝゝろ〜ゝらすとゝさちゝへりいへる也。

又おのつゝらゆ付てハ。ゝの咲され〜人の也。

又思ひもなつま〜き云々ハ。思ひ捨て見放つま〜き人の上ハ。たとひ要きすありても。いとゞ〜けもハ。心ゝ合点〜て。忍ひていを手との意也。

さゞゝなくハ。思ひ放つま〜き故もつけてうらみもぞする。あいな〜。又思ひもなつまゞきあゝりハ。いとゞ〜ふゞ思ひとけバねんおていをぬをやさゞゝなくハうちいで笑ひもゝつべ〜。人の顔ゝとりわきてゝ〜と見ゆるゝハ。さびごとゝゝれども。あなをゝ〜めづら〜とこそ見ゆゝを繪などハあまゝたびゝれバ。めもさずゝ〜。ちゝうたてる屏風の陰ゝどハ。いとめでたゝれどもゝをやられぞ。人のゝゝちハをゝ〜うこそなれ。ゝくげなる調度の中ゝも。一つゝき所のまもらるゝ〜ゝ。ゝふゝくきもさこそハならめとゝふこそわび〜ゝを。

ふき人の上ハのゝ也。

めもたゝすハ。見さめするとのを也。

ゝくけなる調度の云々ハ。見ゝくき物ゝも。一所ハよき所あるものなりとのゝ也。

ひとつを見てハ。一の巻を見て也。二見つけたるハ。さて二巻目ゝかゝりたるをいふ。おゆゆる物語以下一本ゝゆゝ〜うとのゝ思ふゝ。残り見出さる。さて。とあり。

いゝならんとハ。何とあらんと心ゝゝゝる義を見たるをいふ也。

うれ〜き物

まゞゝぬぬゞたりのおゝゝる。又一つをゝていこゞうゆゝ〜うおゞゆるものゞゝりの二ゝつけたる。んおとりするやうもありゝ〜。人のやりすてゝる文をゝゝるゝ。おなゞつゞきあまゝゝゝつけゝる。いゝならんと義をゝて。おそゝ〜とむねつぶるゝゝ。ことゝもあらゞたハせゞゝゝるいとうも〜。よきゝ人の咲ゝゝゝ人ゝあまゝゝさふらふゝゝ。昔ゝりゝるゝふもあれ。今きこ〜めゝ。世ゝいひゝることゝもなれ。ゝゝらせゝふを。我ゝ咲質ゞあハせそのたまゝせ。いひきゝせ給

ゐるもあらすハ。凶ゐあらすとも合せたる也。
我ゐ口質しあてせてハ。我方ゐ貴人の口同を見合せて。語りきらせ給ふをいふ也。
ゐゐやんことなきハ。我ゐゐとりて大切なる人をいふ。
口をしらぬ物ゐハ。才徳なと口惜らぬ者なりとゐめゐふをいふ。
打閑ハ。閑書のゐゐ也。ゐめらるゝハ。一本ゐゐきいれらるゝとあり。
自らの上ゐハゝ我ゐハ歌ゐめられしゐふゐゐとのさ也。

へるいとうもし。遠き所ハさらも也。おなじ所のうちふぐら。ゐゐやんごとなくゐふ人のなやむをきゝていらゐゐとおぼつかなく欲くゐおこたりゐるせうそこえゐるもうもし。思ふ人の。人ゐもゐめらも。やんごとなき人などの口をしらぬ物ゐおぼしのゐふ。物のをり。もしハ人といひハしたる歌の間えてゐめらも。うちぎきなどゐゐめらるゝ。こづらのうへゐハまぐちらぬゐなれど。ふゐおもひやらるゝよ。いさう打とけたらぬ人のいひたる古きゐのちらぬをゐ出さるもうれし。後ゐ物のなりあどゐて見

古きゐのちらぬハ。我ちらさうし故ゐ也。
物のなりハ。書物の中ゐり其故事を見つけたる也。
歌のもとすゑハ。歌の上句下句也。

つけたるハをゐしうたゞ是ふこそなりゐれとらのいひゐさうし人ぞをゐしき。みちの國ぐみ。白きちきしたゞのもちろうきゐきハえゐるもうれし。をづゐしき人の。歌のもとすゑとひたるふ。ふとおぼえゐる。われふぐら嬉しつねふハおぼゆるゐも。又人のとふハきゐくちれてやをぬるゐぞおゐらる。とみふもものもとむるふ見出さる。只今見るべき文ちどをもとめうしふひて。弟の物をかへもぐ見たるふ。ちぐしいでたるいとうれし。物あを世。何くれといどむゐふかちたる。いらでうをしめらざらん。又い

物あてせハ。歌合繪合等の類也。

我ハと思ひて云くハ、我ハ人ふたもらられしと賢ゐをふる人を、さそらうえとるらうれしとの意さて戯れのさそらうる也。

是ゞとうたく、抄ふ黨の字也とあり、或云さふふて養なるべし、といつり養蔚なるとの如く、ちらへしをいふなり。

いとつれなくていさそうられさる人の、ちらぬらをふてるすをいふ也。

つさそうらんとハ、人のあしきを悦ふハ、罪えんと思ひなふらの意也。

さしぐしむすそせみゞう我そとそひてちくさりゞみなる人をうりえくる。女どちふりも男ハまさりてうれしそゞたうを必せんぞらんとつねふ心づうひせらるるもをうしきふ。いとつれなく何とも思ひたらぬやうふてたゆめるもをうし。　ふくきものれ何しきめえるも、つさハうらんとそひふゞらうれし。　ちしぐしむもバせてをうしげなるも又うれし。そふ人ハ我分ふりもまさりてうを也し。　ロあふ人く所となくゐるふ、今のゐりたれバ、すこしとほき程もとあどふゐるをロらんづつけてこちこと作られされバ、たあけて近くめしく入たるこそうれしそれ。　ロあふ人くなのまくを拙作らるゝついでなどふも、世の中のそらざゝちうむつうしうかくを時あるべき心ちもせで、いづちもくいきうせなどやとそふふ、さゞの紙のいとちろうきふらなる、ふき筆ゐきちきし。みちのくゐ紙あどえつをバ、かくてもちバしあをぬべうりくうとふんおゞえ結る、又ううらいべりのたゝみのむしろあをうこまろゐ、へりのもんあざやうふくろうちろう見えたる、引ひろげて見れバ、何う猶さらふは世ハえ必ひをふつまじと、命さへをしくなんなると申せどいみぢ

ハ、指櫛をつくらするゐなるべし。

思ふ人ハ、思ふ方の為ふせしハ也。

今のゐりとれハ、遅参せしなるべし。

ロ前ふ人々云々ハ、例のすさひの筆ふて世の中の云くより、清少納云の啓する何也。

いきうせなそやハ、遁世せんと思ふと也。

えつをハ、人とりもらひしなり。

かくてもちそしハ、紙を大切ふ思ふらに遁世のふもやむと也。

かうらいへりの畳ハ、高麗縁也。

むしろまうハ、彩き表のまみたるをいふ也。

いとゝくハかなきものもハ、皇后の御祓也。古今集ふ、我心慰めかねつる神や姨捨山の月を詠てとあるふまりてさえふを給へる也。

そくさいのいのりハ、残曇なとふて命のふるハ、やすき息災の祈会そとの意也。

残を二十ハ、濱居云、二帖をうなかきふせるようの涙ろといいつり。

きてしめしおきたる事ハ、残ふ命をのふとき〳〵おきたれくハうなきものも慰むなるかな。ををすて山の月ハいうなる人のこるふうとわらハをゆふ。ちぶらふ人をいみじくやもきそくさいのいのりうなといふ。さてのちにわどへて、すゞろなるものを思ひて里ふある比、めでさき残を二十つゝみふつゝこそぬさせよう。作ものふハとくまるもなどのたまハせて、是ハきこしめ〳〵おきたるものありしうべなん。わろうめきべ寿命経をえうくまじげふこそを作られたる。いとをうし。むげふ思ひこれうつるものをもおぼ〳〵おうせゆくりけるハ。なほさゞ人ふてゞふをうし。ましておろうならぬものふぞあるや。心もみゞれてけいまべきゝふ。

ハと也。

ところうんめきハ云々ハ、此残ふく侍らならねハ命のふる慰めふもなるましとの意也。寿命経ハ延命の祈禱の経ふれハ也。

まして愚ふらぬハ、皇后の四ものなれハなり。

かしこき弥ハ、残をうけなる也。さて此つみの験ふ千年も生んと也。主君の給へる残なれハ、うけて申さんも恐多けれとゝいへり。

あまりふやハ、冥加おそろしき儀なれハとの意なるへし。

まき車なとハ、禄物

さもふうれバ、よゞ。

かけまくもかしこきゝみのたるしふハつるれふハひふなりぬべきゝ歌

あまりふやとけいせさせゆくとてまるらせつ。

天だんふのざうしぞ使ふハ来さる。おをきひとゝあどぞとらせてまことにはゝみをはうしにつくまて。もてさゝぐにむつゝきるもまぎるゝ心地してをうしゝ心のうちもおぼゆ。二日バうりみて。あゝぎぬきたる男の。たゝみをもてきてこれといふ。あれハ誰ぞあらハなりなのゝ和

なるべし。
畳をもて来てハ是清少納言の詞ふよりて后宮の給へるなるべし。
まゐりけりハ内衆なとの詞まそ使ハ参りいかゝとの意也。
ゐ座といふハ貴人のたゝる畳也。
さふやあらんハ后宮の給へるならんと心中ふ思へとも。
うせふ々りハ。ゝの使のたゝや見えすなりふゝなり。
猶これ云くハ后宮のゐ方ふとふまてもなく。推りかやうのことさハせんとも。

たゝしさあらいへバさゝおきていぬいづこゝろぞとハそれバまゐりそとそとりいれられバ。特更にゐ座といふさゝこれさまゐてかうらいなどいときよらも。ゐのうちふハちふやあらんとおもへど。猶おなつゝふきに。人ごもゝゝもとめさすれどうせふ々りあやゝゝゐりわらへど。つゝひのふ々れバいふゝひなし。所さゞへなどふらバ。おのづゝらも又いひふ来ふん。宮のゐとりふあないたふまるらせまゐゝれと。猶さきすゞろふちるわざハせん。作ゐふめりといとおうをゝゝ。二日ハゐり音もせねバうゝさゞひもふ

ゝるゐなん云くハ。我方へ推ともふく畳もて来たるふ后宮のゐ方ふさる氣色ハ見給たさりしゝとの意也。
いみゞゝ云々ハ。左京の君の返ゐ也。
思ひゝもふるくハ。推量の通りの意也。
まとひし程ふハ。其使のまゝひ隠れて返りしなり。

く。左京のきゝこれもとふかゝ教こと。なんある。ちるゐやゝしきんゐひゝ忍びてあまさまのゐひて。ちゐ教ゐ云ゝ給ひそといひやりたるふいとゝゝかくさせゐひゝゐ也。ゆめ〳〵先ゞきこえさるとふくのちふもとあれバ。されゞふと。おもひゝもふるくをゝゝくて。文ゝきて又みそゝふ法ゐのかゝらんふおゝせし者たゝ。まゞひゝゐゞふ。やゞてかきおとゝてこたゝしのゐもとゐおちふゝゝ。

積善寺の供養　二百廿九段

関白殿二月十日のゐゞふ法與院の積善寺とい

ふ法堂ふて一切経くやうぜさせぬふ女院さや
の法まへもおハしますべくそれバ二月彼日のか
どふ二条の宮へいらせぬふ歌ふけてぬふさく
なりふしうバ何ぞも見いるまぢ。つとめて日のう
らゝふさゝ出さるゝどふおきされバいとを志
ろうあくらをうをうゝげふつくりたるふみを
よりをじめてきのふうけたるふめり法ちつら
ひ獅子こま犬などいつのゝどふう入るゝんと
ぞをうゝき樹の一丈ばかりふていとゝどう咲た
るやうふて。みをしのもとふあれバ。いとをうち
きたるうふ樹ここそさゞ今ちうりふめるとと見ゆ

つくりたるなめり
ハ。造花をいふ也。
うるさかりけんハ。
うるはしきうも。
こいへなと云々ハ。
小家ともをこゝちて。そこふ二条の宮
を俄ふつくられさ
れハなり。

けちらく云々ハ。假
の山所なれハさの
みけさうくハあら
ねとをうゝけなり
との意也。

るハつくりたるふめり。すべて花の白ひなどち
きたるふおとらバ。いうふうるさかりゝん。雨ふ
らぬたゞみふんうゝと見るぞ口をゝきこいへ
などいふ物れおゝうりける所を今つくらせぬ
へれバ。木ぢちなどの見ゝあるハいまぢなし。さ
ど宮のさまぞけぢうくおうゝげある。殿わさら
せめへり。所をふびのうさもんの山さゝぬき。樹
のなほしふ。ゐれ法ぞこつバうり。只ふほゝふう
さねてぞをりさる。山まへよりをじめて。ゐ樹の
こきうもきゝりものうさとん。まうもんふどあ
るうぎりきたれを。さゞひうりみちて。かうきぬ

うさもんりうもん
ハ。竪役立役也。
あるうきりハ。あり
とある人皆着さる

也。

女房ともを召覽しハ関白殿の見給ふ也宮ふ云々ハ又殿の御也。后宮ふむろひて。何ものを云くハ。召内衆ふ不足ハあるまゝしとの意也。なへすゑてハ。並へ居ゑて也。よくかへり見てこそハ。懇ないさをうつろひ給へとの意なり。いろふいやしく云々ハ。后宮をさして殿の戯れ給ふなり。

たゝとえぎ柳ふ梅などもあり。召ふゐふゐさせゐひて。梅ゐどゆえさせゐふ。召いらへのあらまゐしさを。里人ふわづらふのぞうせゐやと見奏る。女房どもを召覽ドロ〳〵て。宮ふ御ものをおぞしめすらん。こゝらめでゝきくをふべきを。御覽ぜることそいとうらやましゝれ。一人わろきくふーや。是家くのむきめぞうしあれ也。よくうへりゐてこそさぶらをせゐえめ。さてもはきの召んをゞいろふ知をりてあつまりまゐりゐへるぞ。いろふいやちく梅をしみせさせゐふをとて。我ハ生れさせゐひしよりいみどうつろうまつ

おろしの召そハ。召おろしの召衣也。何ものをうりうことふハゝ。ものやうの述懐を何ものハ陰ことふいとん今召前ゐそこそいえめとゝえふれ給ふ也。まことそ云くハ又殿の御也。大納言殿ハ。伊周公也。いとゆうしき云く。又殿の御也。

あやしうとええゝめりハ。后宮のあやしと思召ならんと召等色ゝえたりとの意也。うさしけあくもハ。

きどゞゐぐおろしの召ぞ一つゐえぬぞ。何ものをうりうことふえきこえんあどのゐふゞをものしきふ。みふくくわらひゐぬまことぞをこなりとてかくわらひいまするゞたづうしなどのゐえまるゐどふ内ふり召つうひふて式部のぜう何ゞしまゐれり。后文ハ大納言どのとりゐひて殿ふをらせゐへゞひきときて。いとゆうをき文うなゆるされ給らゞあけて見給らんとのゐえすゑゞあやをうとおゞえてめりうゝどけなくもありとてをらせゐへゞとらせゐひても。ひろげさせゐふやうゐもならゞもてふさせゐふ后ふいふ

又殿の御帝の御文なれハ恐多しと也。すこのまゝより云くハ使ふゐゑのことなるべし。

あゐゝふまゝりてハ。又殿の御也。后宮文と父君の前ゐて開さうね給へハ使の禄いひつけんとてさち給へる也。猶かうしも云くハ。后宮の御ありさま。ゐ斗美麗ならんとハ。元推量すましとの事也。

どぞあるゝき。すみのまゝより女房ちとねちゝ出て。三四人御れ帳のもとふゐるゝり。あなるふまゝりてろくのすゐゝ侍らんとてさゝせぬひぬるのちゐ御文御らんぜ。御返しいこうぢいの戒ふゐゝせぬゐゐ。御ぞのおなゝ色ふ白ひゝる。猶かうゝもおゝいハゝりまゐらするくハふくやあらんとぞ御をゝきゝふいこと更ふとて。殿の御うゝようろくハ出させ給ふ。女のさうぞくにゐ梅のゐそゐゐそくへたり。ちゝなゝゝどあれで醉さまゝゝけをゝど。ゝゝふをいみゝきゝゐの好奇ふ。あゐ君ゆるさせぬゐへと大弱ゐどのゐも申てさちぬ。

君達なとハ。殿の息女さちなるへし。三の御方。中の姫君。皆后宮の御妹也。

うへなゝきこえんハ。貴人の妻と申してもよろしゝらんゐと。おゐきなゝゝのさなるゝなし。いふせき心ちすハ。後少納言も物事ゝ。うちゐて北の方の見え給てさうし也。九ハ何ゝ云くハ。我ハ何ゝ用させん。唯あるまゝふ任せん。なゝいひさゐめて。おくなるゝし。例の君云くハいつもたゐめらるゝ人

君達などいこゝゝうけさうしゐひて。こうぢいのゐぞをとらじとときゐくるふ。三のゐまくハみくゝげ殿也。中のひめ君よりもおゐきふ見えゐうて。うへなゝきこえんふぞよゝめるゝうへもわたらせゐへり。御九帳引よせて。あさらゝくまるりたる人ぐふハえゐをねゐいぶせき心ちす。さしつどひて。ゝの日れちうぞく扇などのゐをいひあハするもゐ。又いどみゝをして九ハ何ゝ只あゝんふまゝうせてをゐどいひて。例の君ゐどにくまる。をさゝうまゝづる人をおゐゝれど。かゝすにまゝづれバ。えとゝめさせぬハず。うへ日

ふと傍輩のいひふくむも。
生うつるハ。里まゐ退出するをいふ。
うへ日こゝふハ。母北の方をいふも。

日ふわたり。ふるもおいゝます。君ぞちゐどおを
まれだ。ゐ。ゐ人まゐ。ゐ。候ハねどいとよし。内の
清つゝひ日こゝふまゐる。ゐ。ゐの撫色ハまさらで
日などふあさりてゐぞみゐゐゐうなるぞふ侘し
きふ。雨のふるふりたる。つとめていみじうむと
くも。いとゝくれきて。なきてゐゐれんぐゝふん
おとりこそすゑとといふをきゝせめひて。ぐふ雨
れゝをひゐほるぞゐし。いゝなゐんとておどろ
ゐせめふ。殿のゐゐゐゐゐゐゐゐのものど
もげをゐど来て。おまゐ花のもとふゐぐゐふ
ふりて。引ゐふゐゐとりて。みそゐゐいきてまぐく

いとをゐしくて。殿のゐゐきして。花のあゐくなゐしを取らせ給ふを感するゐも。

いてぐいてなんハ。後撰集ふ。山守ハいをぐいてなん高砂の尾上の櫻をゐりてかざゐんとあるをいふ。此ハ素性の歌なるを兼澄ゐゐといへるハ其集ふもあるふや

くきともふハ。一本ふ。枝ともふとあり。

まゐゐれつきハ。一本ふ。まゐゐれつき

ゐゐゐんふとれとこそおゐせゐきつを。あけるふゐゐ。ふびんなるわざの歌。とゐゐとゐふしとるふ。いとをゐしくて。いをぐいをふんと。ゐぬずみゐゐをゐひたるふやとゐゐき人ならバいをまゐゐれど。かの花ぬをむ人ハさをぞ。ゐゐゐめりといへべ。わゐひていとぐふげてひきもていぬ。猶とのゐゐをゐゐをゐゐおをすゐゐ。くきどもふぬれまゐゐれつきて。いゐふゐるゐひなゐゐまゐしとゐゐて入ぬ。かもんづゐさまゐりてゐゐゐゐ。ゐゐりとのもりの女官ゐきゐめまゐりいて。おきさせぬへるふ。花のふゐれぞ。あなあさ

とあり。
いろふこるろひか
からましと見てい。
一本ふいろふひん
なきうゝちならま
しと思ふともかく
もいとそとあり。
あな淺まゝ云々ハ
后宮の口詞也
さも侍らすハ見侍
らすとせ以下清少
納言の啟する詞也
さりとも云くハ又
后宮の口詞也。
いでふも侍らし云
々又清少納言の啟
する詞也
妻風のたて侍りな
んハ春風こそ花の
あるなれハそれろ
ち侍りつらんとせ
やさゝき詞なるべ

ましろのたふをいづちいよゝるとゝ作せらる。あ
ろつきぬを人ありといふなりつるハ猶枝ふど
をすこゝをるふやとこそきゝつきたゞちつる
ぞ。ゑつやと作らる。さも侍ず。いまゞくらくてよ
くとゑ侍らざりつるを。たろこたるの侍れど。
花ををるゝやとうゝろめさふ申侍りつると
申ゝさりともかくハいろでうとらん。殿のうく
させゝへるふめりとてわらそせゝへバ。いでよ
も侍らじ。妻風のたて侍りあんとけいまるとか
くいをんとてうくゝもなりうう。ぬゝみふハあら
でふりふこそふるなりつれと作らるゝもめつ

し。
かくいをんとてハ
又后宮の口詞也。春
風のせしといをん
とそ隠すうとのゝた
せ。
ふりふこそ云くハ
雨のたゝさふ花の
あゝくなりし故と
のゝなるべし。
ぬくなれの朝顔ハ
ね乱れ髪のつくろ
をぬうゝ也。さて時
ならすハ朝顔とい
つるより。春なれハ
時ならすといひつ
つけたる也。されと
云々ハ清少納言の
詞也。我見付けさる
ときふ殿こそ知ら
せ給をんとのゝなな
り。

らゝきるなならねどいみゝうめでゝさき。殿おハゝ
ませバ。ねくゝされのあさゞをも時ならゞやはら
んぜんと引いらる。おハゝまゝまゝに。かの花う
せふゝるハいゝふかくハぬすませしぞ。いぎゝさ
からうける女房達ゝなゝたらざりけるふとおど
ろうせゝへバ。はれど我ふりさきふとこそそひ
て侍るめりつれと思ひやうにいふをいとゝく
きゝつゝさせゝひてさおもひつる事ぞ。世ゝこ
と人也てゑ付ゞ。宰相とそことのゝどならんと
おゝいうぎつとていみゝうわらハせゝふ。さう
げなる拍を。少納云を妻うぜふおゝせゝるとゝ宮

さ思ひつるハ、又殿の詞也。
きりけなる物をハ、后宮の御詞也。
そらごとを云く、又后宮の殿ふの給ふ御詞也。
山田もつくるらんハ、貫之集ふ山田さへ今ハつくるを散花のかことハ風ふおゐせさらなんとあるをいふ。
さてもねさくハ、殿の御詞也。
かゝるもれものハ、ちやうのうつけしものゝあるハ、あるふかひなしとのさ也。
春風ハ空ふハ、清少納言の詞を御感あ

の清ふうちゐませめへるめでたゝ。そらごと
をおゐせ侍るゆ。今ハ山田もつくるらんとうち
ずんぜさせめへるもいとなまめきをゝ。さて
もねさくゝ付られふゝる哉。さバゝりいましめ
つる物を。人のふふかゝるもれとめれあるこそ
とのたまハす。春風をそらふいとをゝうもい
ふゝなとぞんぜさせめふ。さバことふをうるさ
くおもひよりて侍つゝけさせまいゝふ侍
らましとてわらハせめふをこわゝ君されどそ
れハいとくゝて。雨ふぬをてさりふどいひ侍り
つと申めへバ。いミどうねさがらせめふもをゝ

る也。
さゝことふハ云く、后宮の御詞也。
ことゝ君ハ、伊周公の御子道雅の幼名也。濱尼云幼稚の時の尊称なて。清上ふもいふなり。巻十一ふ此君の名を松君といつり。
されとそれハ云くハ、小稚君の詞なり。清少納言とく見付てなきてゝゝれん顔ふなといつりと也。
今少し近うハ、后宮の御釈善寺へ御啓近つきてのさ也。花の心云くハ、后宮ゝりの御消息也。白氏文集ふ二月東風

ゝ。さて八日九日のゆどふまゝづるを。今すこし
近うあゝてふどゆらるれど出ぬ。いミどう常よ
りも花ふふてゝりたるひるつゝさ。花の心開けた
りや。いゝゞいふとのゝさまをせたれど。秋ハまゞ
しく侍れどふふけゝびふんのゆる心地ゝ侍るふ
ど聞えさせつ。出させめひゝ。車の次第もふく
まづゝとのゝさゝくゞふくゝれバ。さるべきく
三人と。殿ハ車ふのるさまれいとさゝゞゝく。乗
れ後さなどのやうにさふれぬべくまどふいと
見ぐるゝ。さゞさバれ。のるべき車なくてえまる
らずハ。おのづゝらきこゝめゝつけてさまをせ

来章拙花心開思君
春日遲一夜腸九回
又万葉ふ久方の月
夜を清み梅花心開
けて吾おもへる君
ともあり。
秋ハまゝしくハ。因
古詩の句ふ九月西
風無月冷霜華凝思
君秋夜長一夜魂九
升とあるを春なれ
ハゝくいへる也。
此さひなんハ。九度
なんの誤なるべし。
次第もなくまつま
つとハ。女房達の我
先ふとさゝくも也。
いと見ぐるしハ。一
本ふ見くるゝきふ
とある方然るべし。
おしこりてハ。おし
うゝまりても。

てんなど笑ひ合てゝてるまへゝりおゝこりて
まどひのり果て出てかうゝといふふまざこゝ
ふといらふゝバ。宣旨よりきて。淮々うおをする
と問ゆて。いとあやゝしゝりけるゆ哉。今ハ皆のり
ぬらんとこそ思ひつれ。こハふどてゝくくハおく
れさせ給へる。今ハとくせんをのせんとゝつる
ふ。めづらゝなるやなど驚きてよせさすきバ。さ
べまづ生活志あるつらん人をのせゆひて。つぎ
ふもといふ舟ゆ付て。ゝゝらず服ぎたゝくお
いゝりあどいへゞのりぬ。生活よハ。舟ふゝづ
ゝゝ車よ河れゝ。火をいとゝらきを笑ひて。二条

かうかとハ。こゝ迄汗
うとのこゝ也。
とくせんハ。得選也。
さバまづ云こゝハ清
少納云の句ふそ。さ
らハ先其乗せんと
思ひ。得選をのせ
ふゝ也。
けゝらす云々ハ。
宮司の句。清少納言
のねちけたるさま
ふいへるをいふ也。
笑ひてハ。一本ふゝ
ひてとあり。
こゝよべハ。后宮
の清少納言をめす
也。
いつのまふかうハ
云くハ。二条のゝう
宮よ居つきたるや
うゝ思ゝれしを感
するゝ也。

の宮ふ参りつきたゝり。みこゝハとく入らせゆひ
て。皆志つらひゐさせ給ひゝり。こゝふよべと作
せらるゝゝゝバ。右京小左近などいふ若き人々条
る人ごとふゝれどなゝりゝり。おるゝにたるが
ひ。四人づゝ清ふふまるゝつどひてちぶらふよ。
いゝなるぞと作せらるゝけるもたらぬ。ある限お
り果てぞ。からうゝじて足付られてがバゝり作せ
らるゝふハ。などゝくく遅くとて。引ゐて参るふ足
れバ。いつのまふ。かうハ年比のすまひのさまふ
おハゝまゝつきたるふゝとをゝゝ。いゝなれバ
かう何ゝと尋ぬバゝりハ足えぎりつるぞと作

いらなれハ云〻ハ、后宮の仰こと也、もろともふ乗りたる人ハ、らのおくれとる三人也、さいてハ、最終のさ也、

ちすする者ハ、車の奉りをいふ也、心ちらさらん者云々ハ、心ちらぬ者こそ、人々みくりふ乗車すとそを制するをも遠慮すべ々れ、右衛門なとハ制せよゝしと仰せらるゝ也、

きくらんときこゑハ、一本ふきくらんせらるゝふ、とらくも申さねバ、諸々ふ乗たる人、いとわりなしさいたての車ふ侍らん人い、いらでらとくい乗り侍らん、是もかとくえのるまじく侍りつるを、みづしゞいとほしゞりて、ゆづり侍りつる也、くらう侍りつるをこそ、住しう侍りつ也と、笑ふ〳〵けいもるふ、ゆをする者の、いとあやちきき也、又などらハ、心ちらざらん者こそつゝまめ、右衛門あどハいへらしなど仰せらるされどいらでら、たしまさき立侍らんなどいふもかたへの人ふくしときくらんときこゆ、さまあちうてかくのりたらんもかしこうるべきをらハ、

らしとあり、

さまあしくちて云々ハ、人々のみくりふ乗りさるもよきをあらす、車の前後定法の如く正しくらんこそふらめとゝ、

抱しけふハ、沾機婦あしきさまも、おり侍る程の云〻ハ、侍少納言の泡おのゝ局ふおり居る程の久しさふ、人々待うぬて乗車せしふらんといひとく也、

裳の腰さしハ、縫付などするさまも、

有ゞさげふぞハ、明日を第一の時と、髪定めたらんさまのやんごとならんこそよらめと、抱しげふ思ふたり、おり侍るかどの待遠ふくるしきふよりてふやとぞ申しなほす、沾経のことふ明日わくさらせおいしまさんとて、こよひまゐりたり、みなゝの院の北おとてふさしのぞきたるをバ、高つきどもふ火をともして、二人みたりよたりけるべきどち屏風ひきへゞてつるもあり、几帳ふらふへゞてたるもあり、又ちらでもあつまりゐて、きぬどもとぢらさね、裳の腰さしけさうずるさまをちらまもいたゞかみなどいふ抱ハ、明日より抱ハみゞくさげふぞえゆる、宣

をけづりつくらふ さまなり。給へるなりハ一本ふ給へるなるとある方よし。扇もたせて云々ハ、只清少納言を尋ねて人の扇をおこせたりとも也。まてまことうハ一本ふさて云々とあり。

三四の君も。后宮の御妹さち也。

の時ふなんわ〜らせぬへるあり。なとゝ今まで
まゐり給をざりつる。扇もたせく尋ねきこゆる
人ありなどぼぐ。まて。まことゝとらの時ゝと。さ
うぞきたちてあるふ。あけ過日とさ〜出ぬ。西の
對のこらびさ〜ふなんさ〜よせてのるべきと
て。あるゝざり渡殿へゆくわどふ。まざうひくゝた
きゐどなる今まゐりどもハ。いとつゝましげふ
るふ。西の對ふ殿もませぬへバ。宮ふもそこふお
ハ〜まして。まづ女房。車ふのせさせぬふを。ロ賢
ずとて。みものうちふ。宮。たげいたや。三。四のきみ。
殿のうへ。后御おとうと三とゝろさちふみてお

打むれてたゝ云々ハ。背一度ふのらハ。まきれてもあらんをゝおまりあらハまて。恥ゝしゝりしをいてんとそ也。かきさてハ。書立也。

髮ふどもあぐりやすらんハ。物の分ふたみておぢゆる時ハ。毛のふゞつ物也。こゝハあまり恥しさふぞつとするき

ハ〜ます。車のたゝ右ふ。大納言。三位中將二ふ〜て。
すゞれうちあげ。下すゞれひきあげてのせあふ。
皆打むをてゞふあらだゝくれふやあらん。四人
づゝかきさてふたゝゞひて。それくとよびさて。
てのせらを奉りあゆみゆく心地。いゝゞうまこ
とゝ淺まし〜うけせうふうともよのはねせ。みを
のうちふそこらのロ目どものなゝふ。宮のロふ
のえぐる〜とロ覺ぜんハ。更ふ侘〜きゆかぎり
なし。汗より汗のゆれバ。つくろひさてさる髮
なども。あぐりやもらんとおぢゆ。ゝらうじて過
されバ。車のもとふ。いゝゞうもげゝ〜げふ。清げ

せ。

されとゝふれすハ、恥しさふあもむ心ちもせぬ、ごろびぬへうゝしをゝふれもせてのゝ也。

ゑぢハ、編也。

なるゐさまどもたて、打ゑみて見めつも現ふらむ。されどたゝふもとぞ。そこまでハいきつきぬるこそ、ゝーこき顔もなきゝとおゞゆもど、皆のりて

院ハ、東三条女院也。

てぬきバ、引出て、二条の大路ふ、ゑぢさてゝ、扇見車ゝやうふて、立ちらべさるいとをゝし、人もさ見るらんゝーと心ときめきせらる。四位五位六位などいゝ、ゑうおゐういでいり、車のもとゝ来て、つくろひ拍いひなどす。まづ院のゐむゝへゝ。殿をもじめ奉りて、殿上と地下と皆まゐりぬ。それ

おもしますハ、女院の出ゐ也。ゐまじめふハ、女院のゐ車とゝもふ也。院方のゐ車の数也。

かどりのうもぎハ、すゝしふて、裏表あるをいふ也。

れわゝらせゆひてのち、宮ハ出させ給ふ。ゑ殿しとあをバ、いとゝ心もとなゝと思ふゐどふ、日さゝーゐ

ゐりてぞおハゝーます。ゐ車ごめふ十五、四ハ尼車。一のゐ車ハからの車なり。それふつゞきて尾の車、ゐりゐふりすゐさうのずゝ薄墨のけさきぬなどいみゞくて、すゞれハあげず、下すだをもうも色のもそすこーこき、つぎふさゞの女房の十。櫻のゝらきぬ、うすいろの裳ゐをおーわさし、かどをのうもぎどもいゝゝどうなまめゝーー日ハいとうらゝゝゝなれど、空ハあさみどりふかすみわたるふ、女房のゐうぞくの白ひあひて、いみゞきおりぬの色々のゝら衣などゝもふまめゝらしうをゝーきるりぎりふし、蘭白殿をゐつぎれ殿

此ものとも、后宮方の四車也。

出させ給へ、、、一本ふ出させ給へんとてなり。

くさい、、裙帶也。

豐前、、采女の名也。

指貫をきたれ、、、豐前ゝ出さち也。昔、、女房も馬ふのる時、、指貫をきさる也。

色ゆるされふけり

だら、おたするゝぎりもてゝつぎ奉らせゆふ。いとゞうめでさ、これらゑ奉りさゝぐ此車どものニ十立なるらびたるも、又をゝとゑゆらんかゝ、いつゝゝゝ出させゆふいゞふどまちきこえさるふ、いゝふらんと心もとなくねもふふゝゝらうだて、うねめ八人るふのせてひき出づめり、きそごれ裳くさい、ひれふどの風ふ吹やられたる、いとをゝし、豐前といふ采女をくせ、たげまさゞたる人なり、えびぞめのおりぬのさ、ぬきを着さをバ、たげまさい色ゆるされふゝりとゝの井れ大納云ハわらひゆひて、皆のりつゞきて

指綱そりて、、、ゝ塗の指綱を張さる也。頭の毛なと云々、感深きときハ髮のさつどいふもまてと、のさ也。

さて板ふ云々、、髮のさちてなてつけしももそ、けてあしくなりたらんを、人々ゝこつへしと也。

かしこうおゆるる、、一本ふかゝ、、蒲萄深の織物の指貫きたれい也。

たてるに、今ぞ塗こゝ出させゆふめでたしと見え奉りつるゝはありさまふ見ハくらぶべゝらざまゝり、翌日をなぐとゝ、、あゞるわどふ木の葉れいと花やゝゝよゝゞやきて、こゝのゝさびらの色つやなどさへぞいこゞきゝはつふそりて出させゆふゝはこゝの惟子のうちゆるぎたる程まことにゝゝらの毛ふど、人のいふを、更ふそらごとならず、ねのちふあゝゝらん人をかこちつべゝ、あさまゝゝうゝはいつくゝゝ程いゝでのくるゝはふふなれつゝうまつるらんと、我身をかゝこうおゆるゝはこゝるさせゆふふど、車のちぢども人

そ云々とあり。人さまひハ。副車也。

大門のもとハ。釈善寺の大門也。こまもろこしの樂としてハ。樂ふ高麗の樂。唐の樂とてある也。

あげだうハ。和名鈔ふ幄。阿什波利。大帳也とあり。へいさんハ。屏幔ふて。幕の類也。

ゐさじきふ云々ハ。后宮の御桟敷ふ。女房の車をうせし也。

ざまひふかきおろしたりつる。又牛どもうけて。みこしのちりふつゞきたる心地の。めでたう奥あるゑさまいふゝなし。おハしましつきされバ。大門のもとふこまもろこしのがくたて。獅子こまを犬をどりまひ。さうの音。つゞみの聲ふ和もおぼえず。こハ。いづくの佛の御國ふどふ来ふけるふゝならんと。ゆ。肉ふ入ぬれバ。いろ〳〵の錦のあげだうふ。みもいと高くてかけ渡し。へいさんふどひきたるふどなべてさゞふハ世とおぼえず。御さゞきふさしこせたれバ。ハ殿だら立ゐひて。とくおりふと

要つる所とふ云々ハ。ささきふ乗車せし所さへたれゝまし。ゝりしふハ所ハ又それゝうも顕添ふるふの意也。

色の黒さ赤さハ。髪の毛の色なり。

ちりそうせ給へ云々ハ。虎ある女房の。伊周公ふ申す河也。

ちりおもしてハ。伊周公の。姫少納言の

のたまふ。のりつるゐゞふありつるを。今すこしあゝうけせうなるふ。大納言殿。いと和々ちくきふゞけふて。御ぞをうちあげて。なやとのゐふ。ほくろひそへる髪も。ゝらきぬの中まて。ふくゞこあやちうなりたらん。色のくろさあゝさハへ見ゆゝれぬべきわどなるゞ。いと侘しゝれだふともえおりぬ。よづちりあることそハふどいふわどもそれも同じ心ふやゝちりぞゝせぬへ。うゞけふしふどいふ。をぢゐふゝなど笑ひて。立ゝへり。からうぢておりぬれバ。よりおいして。むねさゝふゞ

方ふうう来て也。むねさうなしとふ云々ハ伊周公の冠宮の作ことを承りて来りしをの意也。さきこえ云々ハ后宮のまことふ伊周公ふ作られしあらんと思ふものさこ。こゝふさちうくしふ云くハ伊周公の冠立うくして。これてゐてまゐりしとのさ也。抄説恐らくハ紙あらん。

ふえせで。かく云て却ておろせと。宮の作せらるれど来たるふ思ひぐまあきとて。ひきおろしてゐてまゐりのふさきこえさせぬひつらんと思ふもうゝどけふ〜まゐりたれバ。そじめおりける人どもの。却れ見えぬべきはしふ。八人ぞうり出ゐふゝり。一尺と二尺バうりの高さの。ふぞ〜のうへふたを〜ます。こゝふさちかく〜して。ゐて糸りたり。と申〜ぬへで。いづらとて。几帳のこふさふ出させぬへ。まざかからの口ぞも奉りなぶら。おい〜ますぞいみ〜きゐの法ぞふろ〜うらんや。中ふうらあやの却れ口ぞ。えびぞめの五重の口ぞ。赤色のうられ口ぞ。地ずりのうられうす物ふ。ばうがんうさぬさ新法裳ふど奉りたり。おり却れ色更ふなべて似るべきやうふ。我をぞいうゝ〜るとおふせらる。いみ〜うあんさぶらひつるなどもことふ出ていふのつねのこそ。久〜うやゐつる。それを殿の太夫の院の口借ふきて。人ふ見えぬる。おなじ下がさねなぶら。宮の口借ふあらん。わろ〜と人思ひなんとて。ことふ下がさねぬハせぬひるゐどふ。おそきありけり。いとすきぬへ。まあどと打わらハせぬへる。いとあきらうふされて。今すこ〜けざやう

ざうぐんハ。象眼唐衣の名也。又細き泥繪なとゐる也と抄ふいへり谷川氏云。うすものゝ名也。我をハいうゝ云々ハ。后宮の法何行啓の作の程の儀式の事也。

久〜うや云々ハ。又后宮の口何出侍の遅うりし故を口物語し給ふ也。殿の太夫ハ藤原乃忠公也。

同し下襲云々ハ。女院の供奉ふて。人ふ見られし同し下襲をきて。又后宮の口供ふもまゐらんハ。

人目ゐろしとその
さま。
ちひ〳〵ひハ。和名抄
ハ蔽髮。比太毘。蔽髮
前為飾也とあり。
さいしハ。笄子也

ゑさまふ云々ハ。ゑ
く縁をとりたる也。

ふめでさう。ゐひ〳〵ひあげさせゆ〳〵るさいし〳〵ふ。
ゐとけめのゐぐしの。いさ〳〵ゐりて。ゐるくゐ
えさせゆふなどさへぞ。きこえんゐ〳〵おき。三尺
の清きちやう一〳〵ゐろひをさ〳〵ちゐへて。こな〳〵
れへゞてふハ。まそ。甚うしろふを。さ〳〵み一ひら
をながゞきまふへりを〳〵てゐゞしの上ふ。ゐきて。
中納言の君といふを。殿の御伯父の。兵衛ゐゐみ
さゞきゐ〳〵ときこえけるゐゐむを。宰相の君と
ハ。富小路の左大臣の清孫。それ二人ぞ上ふ。
ゐえゆふ。ゐ質ゞわ〳〵て。宰相ハあなゐふゐて。
うへ人どものゐさる所。いきてゐ〳〵と作せらる

〳〵ふ三人云々ハ。
宰相の君中納言と
三人あらんと也。
殿上ゆるさる〳〵云
々ハ。是ハ童殿上な
とのなる宮也。清少
納言の召上られさ
るを。内舎人ふ准へ
ていふ也。
うまさへハ馬寮童
也。
そこふ入居て云々
ハ。清少納言の心の
うちふ思ふやり也。
ゐ〳〵るゆハゐく我
身の面目なるゆを
也。
ふきゞ〳〵うハ。濱ゐ
云。今俗ふいふ吹聽
の吹の義ゐといへ
り。

るふ。心得てこ〳〵ふ三人いとゐ〳〵ゐ侍りぬべし
と申せゞ。さゞとてめ〳〵あげさせゆ〳〵ハ。ゐもふ
ゐる人〳〵。殿上ゆるゐる〳〵内舎人なりとわ
らハせんと思へるゐるゐといへゞ。うまさへのゐど
ぞなどいへバ。そこゆ入ゐてゐるハいとおもゞ
ゞ〳〵ゐ。ゐるゆあどを。ゞゞからいふハ。ふきゞ〳〵
りふもあり。又君れゐ〳〵めふも。ゐろゞゐうがバ
ゐりの人をさへおゞし〳〵んふゞ。おのづゐら相
〳〵ゆ世の中もどきふゞとする人ハ。あいふくかし
てきゐるゆふゐ〳〵ゆて。ゐ〳〵ゞけふゐれど。あふ悉
きゆなどハ。又いゐゞゞハ。様ゆ身の程ゆ〳〵るゆも

又いらゞハ、主君の召上らるゝふ人のおもてくを憚りて、おらおそれうまし と辞退申さんハ又いらゝあれハのさま、

てうどを負ひて、武官の調度ふて、弓箭なとをいふ。

入らせ給ひていハ、関白殿の后宮の御方へあり。

今いらへハ今以来ふそ、いらいなるへ

ありぬべし、院の御さゝき、所々のさゝきどもゑわさしたるめでさし、殿ハまづ院の御はゝきふまゐりたまひて、おらおそれうまし、ふバしあてこゝふまゐりめへり、大納言二所、三位の中将ハ、陣近うまゐり々るまゝふて、てうどをおひて、いとつきゞきうをゝしうておをす、殿上人四位五位、こちさう打つきて、清借ふ俗ひなみゐさう、入らせめひてゐん奉らせめふふ、女房なるかぎり、裳ゝらきぬみくしげ殿までさまへり、殿の上ハ、裳のうへふ、ふうちきをぞきめへる、繪ふゝきたるやうなるハさまどもこのな今いらへ今日ハと申しめひそ、三四の

しさて此後ふゐりて、今日ハゝく窮屈ふる同見しと申し給ひそとも皆裳唐衣ふて行儀正しき故なり。

此年の主君云々ハ、この中ふハ、后宮こそ上ゐそおをせとも。

あゝいろ云々ハ、清少納言のさまも。

法服云々ハ、関白殿の戴れて清少納言の赤衣を法服ふゝるへき物をとも。

さやうの云々ハ、清少納言のきぬのやうなる物をきり調せんとの言も。

清信都のふやハ、伊周公の清少納言の

君ハ清裳ぬゞせめへ、はなゝの主君ふハ、おまへこそおハしませ、ハさゝきれまへ、ふぢんをすゑさせめへるハ、たゞろげのゐゝとて、打なゝせ給ふゞゐとみる人も涙ぐましきふ、あゝいろさくらの五重のうちきぬを着たるをハらんじて、法服ゝくざりさらざりつるを、俄ゐまどひたつるふこれをこそかり申すべゝり々れ、さらバもし又、さやうの物をきりたゝらめたるふとのめえもるゐ、又わらひぬ、大納言殿すこしたゞきゐるめへるゞきゝめひて清信都のふやハらんとのめふ、ひとことゝたてをうしうらぬゐぞなきや、信都

ゐをぎれていひさる也赤色の衣を服ふゝらんと殿のさえふれしふゝりて也。

僧都の君ハ隆円也。ぞさちハ菩薩也

僧綱の中ふ云々ハ。僧四僧如律師を僧綱といふ也。さて僧如ゐてまゝ〜まゐで僧綱の中ふ威儀を正〜くゐてこそおそさめと隆園ふ女房の申すさしふれ也。此晴隆園をさゐゐりしなるべし。陸奥ふゐハ父の大納言殿のゐゐをるてゆく也。

ゐはゞまりてゑ法事也。

の君あゐ色れうも袙のゐころも紫のけさいとうすき色のゐぞどもさ〜ぬききめひてぞさちのゐやうゐて女房ふまゞつまあまきめふもいとをゐ〜僧綱の中ふ威儀具足〜てもおい〜まさで見ぐる〜う女房の中ふなどわらふ父の大納言殿ゐまへふり拉君ゐて奉る。えび染のおり袙のふゐし。こきあやのうちさる。ゐ梅の袙などきめへり。俗の四位五位いとおゐゐり。ゐさゞきふ女房の中ふいれ奉る。俗ゐのあやまりゐゐ。泣の〜ちりめふさへいとをえぐし。ゐをゞまりて。一切経を蓮の花れあゐきふ一をゐづゝゐい

一切経を云々ハ。一蓮ふ経一巻づゝ入れて也。

あぐらハ胡床也。腰ゐくる床几の類をいふ勅使の座まうけたる也。

やゐてふさり云々ハ。宣旨の詞也。

猶ゐへりて後ハ。則理禁中へ返りて後入ゐあらんと也。

いらせ給ひなと云ハ。一ゐ〜ふ給ひゐん

きて。俗俗。上達部。殿上人。地下。六位。何くゐまでも渡る。いみゞうさふとし。大切乃。導師まゐり。意ゐう志バ〜まちて。まひなどをる。日くら〜ゐる。ふ目もたゆくくるゐう。内のゐつゐひふ五位の藏人まゐりたり。ゐさゞきの前ふあぐらたてゝゐるゐゐどげふぞ怪めでさき。夜さりつゐ〜式如のぜうのうまさまゐりたり。やゞて歌さりいらせめふべし。ゐ供ふさぶらへとせんゞ俗りつとて。ゐへりもまゐらず。宮ハ猶ゐへりて後ふとのめえすゐども。又藏人の辨まゐりて。殿ふとゐ消息あきを。只作のまゝとて。いらせめひなどす。

とすとある方然るべし
ちりのちなりまハ、陸奥の千賀の塩竈ちりなりら辛きハ人ふあもぬなりけりとあるさまて、女院居宮と近く在しなりらハ對面ふきすをいへるせずざともハ、從者とも也、

院の内さゝきより、ちりのちなりまなどやうのハせうそこをゝしき物などもてまゐりらふひたるなどもめでたしすてゝ院らへらせあふ、院司、上達部などゝはさびハらさへぞつゝうまつりあひける、宮ハ内へいらせあひぬるもちらば、女房のずさどもハ、二条の宮ふぞおいゝまさんとて、そこゝみふいきゐて、まてどゝ見えぬわどふ、袴いとう更ぬ、内ふをとのゐ物もてきたらんとまつふきふく見えぞ、あざやらなるきぬの身ふもつゝぬを着て、寒きまゝふ、ふくみ腹ゞてどかひふし、つとめてきたるをいらふかく心なきとなふゐるごともハ、從者を去らる河の、皆同しやうふて、唱ふる如くの事也、

ゝらすくせハハ、我前世の果報見ゆと悦ひ給へる也、

きふく見えすハ、今いふさつぞり見えすの事也、

九条錫杖ハ、不空三藏の作一巻あり是ふふしたらせを付て、舞的ふするゝ、

杉さてる門ハ、古今集ふ我宿ハ三輪の山本恋〳〵くハ訪ひ来ませ杉さてる門とある歌をいふ、

風俗ハ、風俗のうゝひ物とそあり、

ぞなどいへバ、となふゐるごともさいなれさゝ、又の日雨ふりたるを殿ハこれふなんわゞすぐせハ見えぬ侍りぬる、いらゞ山らんずるとゆえさせふふ山おちゐることゝうなり、

さふとき拍　二百サ九段

九条去やくぢやう、念佛の百ゝう、

歌を　二百三十段

杉さてる門　神乐歌もをらし　今やうたふゞくてくせづきたる、風俗ゝくうたひさる、

さゝぬきハ　二百三十一段

むらちきのこき、もえぎ、百ハ二ぬ、いとぬ

夏虫の色ハ裏のあきすゝしの惣名を蟬の羽色といふ類なるべし

ひのさうぞくハ昼の装束といふ意ゝて束帯のすせ其袍の下ゝ着る紅の一重をいふ

裕色黄を多なるハ紅の色さめたるをいふ

練色の云々ハ練色ハ赤きをいふ さて

つきは夏虫の色しさるも涼しげ也

かゞぎぬを　二百卅二段

かうぞめのうすき　白き　ふくされあろ色　松の葉色なる　青蓮　さくら　極又あをき

ふぢ　男ハふゝ色のきぬも

ひとへハ　二百卅三段

ゐき　ひのさうぞくのゐのひとへ　あこめか

どかりそめふ着さるハ　ふゝしさきど猶色黄ばみ

たるひとへ　あゞふ着さるハ　いと心づきあし　ねり

色のきぬもきゝさきど猶ひとへハ白うてぞ男も

女も万のすまさうてこそ

裕色の衣をも勿論きハ着れともものさせ

さるハ云くハ河の文字一つのせんさくもするなんとそも人の上のみ沙汰して自ハ万すみもくれてもえせすとのそゝ

さうとも云々ハ我すくれもしてハ人の上をもくくハたられし性思ふ侘を口ふまろせていふあらんとゝ

わろきものを　二百卅四段

河の文字なやしくつゝひさるこそなきさゝもド一つゝあやちくもあてふも賤ちくもなるハ

いゝなるふゝなるハ　さるハかう思ふ人ゝろづのすふすぐれてもえあらドゝしいづきをよき

あきといちるふゝなるふゝなるハ　さりとも人をちら

じさゝ打おゞゆるもいふめり　雜義のすをい

ひて　をすさせんとすといそんといふをゞ文字

をうしふひさゝいちんずる里へ出んぜるなど

いへバ　やゞていとわろしまして文をゝきてハ

いふべきふもあらゞ　拙ごそあしうかきあど

つくり人さへ云々ハ、書損すれハ、作者ふさへ筆の妻也とのこと也。
ひでつくるハ、秘点を付るをいふ。

我何ふもてつけて云くハ、特更ふいふハよゝれと、常の何ふいふハこゝろしとのこと也。
下襲ハ、打、張、綾なと品々あり、公卿及び禁色の人ハ、綾を用ひ、凡色の人ハ、平絹く。

まれバ、いひゞひたく、つくる人さへいとほしゝ。きぶほそ、定本のまゝふどゝき付さるいとゝをし、ひでつくるまゝふどいふ人をありき、ものとむといふをゝんと皆いふめり。いとあやうきをゝを男などもわざとつくろハで、殊更ゝいふハあしこらぬ我何ふもてつけていふゞ心おとりするゝ也。

ちさがさねを　二百卅五段

冬ハつゝゞ、搔ぬりがさね、蘇芳かさね、夏ハ二あゐ、白ゞさね。

扇のゝねを　二百卅六段

赤色ハあろきハ、赤色の地殘なるハ、赤骨くもるとも也。
ひあふきハ、檜扇也。
むもんハ無地のをいふ。

八幡云々ハ、廿二社次第云八幡三所應神天皇神功皇后玉依姫とあり

佐保殿ハ、奈良ふあり、淡海公の家冬嗣の大臣の家と拾芥抄ふあり。

あをいろをかゝきむらはきハこゝとり。　二百卅七段

ひあふぎハ

むもん、うらゐ。

卯ハ　二百卅八段

松の尾、八幡、はゐ國のみゝどゝをおハーまし〻〻んこそいとめでさゝれ、行幸ふどふふぎれ花のみこゝふ奉るふど、いとめでさゝ、大原野賀茂ハ更くいなり、春日いとめでさく覚えさせゝふさゝどのなどいふ名さへをゝ、平野をいさづらなる屋あまゝをこゝハ何せる所そととひゝゝバ、みこゝやどりといひゝもめでたしいゞきふ

秋ふハあへもハ、古今集ふ千早振神のい垣ふもふ葛も秋ふハあへも移ろひふけりとある、貫之ら歌をいふ。

いらゞさきハ、近江國なるゑ、蜻蛉日記ふよりてあるし、三條ら崎、駿河國也、更ろ屋ハ、ちいさき賤の屋をいふ。あゞまやハ、和名鈔ふ四阿、阿豆万夜とあり。

時奏するハ、禁中ま夜時を奏するゑあり、玄の一刻より、左近衛、夜行して、官人時を奏も、丑の一刻

蓍ふどのおろく〳〵まてゐ蓍のそゝあまし、秋ふハあへぞと貫之ら歌ふひ出られて、つく〳〵と久〳〵うさゝもさまし、みことりの神いとをらし、

崎ハ　二百卅九段

こゝらちき、いらゞさき、　三條ら崎、

屋ハ　二百四十段

まろ屋、あつまや、

時奏する　二百四十一段

時そうするいみゞうをらし、いとゞう寒きゑ、夜ふらゞりなどふごろ〳〵とごゝめきくつもりきて、つるうちふどゝして、なんけの伺らし、時うし

ありまさ左近衛夜行する也、こゝ〳〵とハ、官人のをもふきの殺せつるうちハ、弓弦を引きならす也、ふんけの云々ハ、何家の某と名乗る也、時のくひハ、漏刻ハ、銅壺ふ水を入て前をさてゝ、其前ふ四十八刻をつけて、彼銅壺の水の滴りて、一のさゞを現せハ、則ち一刻也、四刻を一時とす、故ふ子一、二、三、四ゐといふ也。

うつ、ねよつなどあてゝうなる聲ふいひて、時れくひさも音などいみゞうをらし、ねれつうしハつなどこそ、さとびる人いいへもべく伺もく、よつのうぞくひもさゝけるゐ日のうらゝことあるひるつ方、いさうゐ殺ふけて、ねの時ゐどゝひまるらする程ふをのこどもめゝたることそ、いとゞうをらゝ〳〵も、殺中だうゑ、又清ふえれきこえさる、いみゞうめでたし、

成信中將　二百四十二段

成信中將を、入道兵部卿の宮れ以ゑよて、かゝちいとをらしげゑ、ゐをつもいとをらしうおもも、

暁ふいくとて云々ハ女の伊豫へゆくとて名残ふ成信のおとゝせし也。
そのゝみ常ふハ女の未さ忘られさりし時也。
のさまひ〜ふハ物語ふ絵ひし物をと。俗の書さしてとめたる也。
くすゝうする者ハ実法ふする人也。名をさうふてハ其名を姓ふてつけさる赤染衛門薮式部なとの類也
をゝしき方ふとも

伊とこのねもけゝむすめれ忘らをて。伊豫へおやのくだり〜みど。いゝふあもれなるそゝんとこそおぼえ〜ゝ。暁ふいくとて。こゝろひおをしまして。ゝ月の月に。かへりみひそん直衣姿ふどこそ。そのゝみつねよみて。掛けゝうし人のうへなど。わろきハとろ〜などのさまひ〜よ。

兵部　二百四十三段

掛いみふどくもゝうもる者の名をさうまてもたる人のあるゝ。こと人の子ふなりて平などいへど。さゝもとの姓を若き人こ。ことゝぐさまてわらふ。ありさまもことなるふ。兵部とて。をゝうさきハ風流の方も有難きの意也。
さしまし〜りハ物ふさし出る也。
腹きさふく云々ハ。腹もを地とろく兵部ふ宮のゝけしきを忘りて居る人もなゝりしと也。
兵部のおとゝ。一本ふおもとゝあり。

しきかゝさなどもゝうさきゝ。内もゝ五人ふどふさ〜まじ。心などのなるを。ゝまへわさりふ。見ぐる〜ふど作せらるれど。腹ぎさふく。ゝりつぐる人もふ〜。一条の院つくられたる一間れふまハ。つらき人をバ内らふよせを。東の口門ふつとむうひて。をゝ〜きふびさ〜ふ。式部のおとゝもろともに。夜もひるもあれを。うへを常ふ内ゝらんドに出させふ。こゝろひハみふうちまねんとて。南のひさ〜ふ二人ふ〜ぬるのちふ。いみじうさく人のあるふ。うるさ〜ふどいひあをせて。ぬさるやうをてあれど。寝いみゝうかゝ〜ゝまして

あれおこせ云々ハ、居宮の白河也。

やうてゐつきて云々ハ、彼兵部清少納言なとのおきぬよしを、戸さゝく男ゐいひふゐきて、やうて其男と語ふ也。

只みそうゐハ、清少納言なとのひそう笑ふ也。

此君いとゐゝし云々ハ、檀中将清少納ふ心さして来たるふ心あさきあとざなれバそしるまゝ

雨のいみしう云々ハ、兵部の河也。

ふぶをあをおこせ、ゑねならんと仰せらるゝ。
で、は兵部きておこせど、ぬさるさまあれバ、文ふ
おきゐそばりゐりと、いひふいきたるゞ、やゞて
ゐつきて抱いふなり、ちゞーうとゐふふ、夜いさ
うふゝぬ、檀中将ゐこそなあれ、こを何をかう
いいふとて、只みそうふ笑ふも、いうでうちらん、
暁までいひあうーてかへりぬ、此君いとゆゝし
うりゝり、更ふおをせんよ抱いえど、何をさい
いひあうすぞなどわらふゐ、やりゞをあけて、女
をいりぬ、つとめて何のひさーふ、抱いふをきけ
バ、雨のいみじうふる日、きたる人あんいとあを

きなる、日ごろおゞつうなうつらきすなりとも、
さてぬをてきさらバ、うきさるも皆忘れぬべしと
ゐ、ゐどていふようならんをゐ、べも昨日の夜も、
それゞなゝこの歌も、まべてはは、をうちちきり
見ゆる人の、こよひもいみゞうらん雨ふ、ちいハら
でき、らんい、一歌もへゞてゞと、ふふめりと、
あをれなるべ、ちて日比を見えぎれゞつうふ
くてすぐさん人の、うゝ、歌ふしもうんをゞさ
らふ又、心ざしあるふを、えせゞとこそ思へ、人の
心々あをバゐやわらん、抱見ーを、ふひちりさる
女の、心ありとゐ、ゆるかゞをゞ、りさらひて、あま

あなたの夜ハ一昨夜なり

もとゝりのよすゞハ。もとゝりたゝろと頼む本妻をいふ。

さいくゝをあまもとゝりのよすゞなどもなるバ。たゞうしもえこぬを。怪さるいゝどゝあまゝをりふきさとりしるあど。人まも語りつゞせ。身を任めらもとんとゝふ人のゝわざまや。それもむげふ心ざゝなゝらん。何ゝふゝハ。はもつくりずたてもえゝとも思ゝん。さきど雨のふる時ハ。さゞむつゝしう。今朝までえもゞしゝうつ教室ともおゞえむ。ふくゝて。いみじき細殿の。めでさきゝとおゞえむ。まして。いとはらぬなどハ。とくふりやみねゝとこそおゞゆれ。月のあゝきふきたらん人ハしも。十日廿日一月。もゝハ一

月のあゝきふきさらん人ハしもハ。一本月のあゝきハしも。ゐふしゝさ行末

まてゝゐひのこさるゝるゝあゞ心もあくゝれめてくゝあもれあるゝたゞひあくおゞゆそれふきたらん人ハ。十日二十日とあり。

こまのゝ物語今の世ゐはらぬもの法なり。

虫ゞみさるかもゝりハ。ゝゐみ虫のさしさる扇也。もとゝし駒。一本ふ

年ふてもまゝて七八年ふなりても。ゐひ出さらんハ。いみゝうをゝとおゞえて。え逢ふまゝじうわりふき所。人めつゝむべきやうおまとも。ゝふらず立ゐゞら拙いひてかへし。又とまるべゝらんをゞ。とゞめふどゝつゞし。月のあゝき見るゞゝり。とほく物ゐひやられるふしゝうゝうしも。嬉しゝうしもをゝしとれゞえゝも。只今のやうふおゞゆる打やいハある。こまのゝ拙語ハ。何ゞゝりをゝゝきるゝもなく。泊もあるめき見所おゝらねど。月ふむゝうゝをゐひ出て。虫ゞみたるかえゞり取出て。もとゝ見ゝこまふといひてさてるゝ

もと来しこまとあり。さて大和物語ふ。夕されハ道もとえねねと故郷をもと来し駒ふまうせてそ母くとある歌をいふなるへし。

うどあそれ也。或云。さてるゝいと哀也と有けんいとのいの字おちしふるべし。

うゝ野の少将云々ハ。落窪の君を。右近少将といふ人。心さし深くて雨のふる夜うゝひそめさう其頃交野の少将といふ人も。此君ふ心うけされどうひふうりしをいふ。さて此事落窪物語ふあ

どあハきを也。雨を心ゆとあき抱と。ゆひちみゝさきをゝや。かゝと問ふるもいとふくゝぞ何る。やんごとなきゝ。面ねうるべきゝ。考とくめでさうるべきゝも。雨どふふをバ。いふうひふくゝ口をゝきふ。何うゝをぬれてかこちさらんゞめでさうらんゞ。ふうゝの少ゝ物もどきたる。おちくゞの少物などハをうし。それもよべをとゝひの夜もみゝしうバこそをうゝれ。足洗ひさるぞふくゝきさふううゝん。さらでハ何うゝ風などの吹あらゝきゝ。歌きたるハゝさのもゝくてをうゝもありふん。をこそいとめでさゝれ。ちんめやなどひとうご

り。足洗ひたるそハ。右近少将。三日の夜往ふておもし。水もて口足をもませしるあるをいふ。

ろくさう。緑衫ふて六位の袍の色也。

衛府ハ。衛門兵衛の類也

かく聞て云々ハ。兵衛ゝ河をさしていへる也。

ちて。ちのびゝさるゝハちらせ。いとゝさあらぬところも。直衣などを更るもいをず。かり衣。うへのきぬ。藏人のゝのをいろちなどの。いとひやゝうゝぬをたらんハ。いゝゝどうをうゝかるべし。ろうちうなりとも。をふゞにぬれをゞ。ふくゝうるまゝ。むゝうゝの藏人ハ。ふるあゞ人のもとあゞふ。さゞあを色をきて。雨ふぬれてゝ。ちゞりなどゝけるとう。今ハひるゞふ着ざめり。只ろうさうをのゝこそ打かつぎためを。色ふなどの着たるをまゝしていとをうゝうゝし物を。うゝ少て。雨ふありうぬ人やハあらんずらん。月のいとあうき歌。ゐの残のいみ

じうあらきふさゞハならずとも云たるを、ひさしふさしいれたるを、月ふあてゝ見しこそをゝしうりしゝ。雨ふらんわいはさをありなんや。

むづさ　二百四十四段

常ふ文おこする人の、何ゝい、今ハいふゝひふし、今ハなどいひく、又の日おとゝもせねバ、はもゝゝあけさてバ、文のゑんえぬこそ、ちうぐしゝれと云ひてさてもきいぐしゝりける心ゝなふどいひてくらしつ、又の日雨いさうふる、ひるまで音もせねバ、むげふ石ひ強えふゝりふどいひて、なしのゝうにゐたる夕ぐれふ、笠さしたる童のもく

何ゝを云々ハ、つれなきを恨みたる男の句也。

あけさてハ、夜あけぬれハ也。

きゝくしハ、屹と云たるさ也。

水まさ雨のハ、古今集ふ真菰ゝる淀の河水雨ふれハ常よりことゝまさる我恋とあるを略せる句なるべし

あゝさハさしもあらす、一本ふ今朝ハさしもえゝさりつる空のとあり。

びゝしきハ、美ゝしき也。

家のゝハ家の外也。

むもべたるハむすもれさるの約也

ひきゝさしける墨ハ封し目の墨也

きたるを、つねよりもとくあけてゝれバ、水まさる雨のとたる、いとおかくゝみ出ゝつる歌どもよりハをゝしさゞあゝさをさしもならず、さえつる雪のいとくらうかきくもりて、雪ゝきくゝしふる、ふいと心ゞそく見出もゐどもなく、白くつもりて、猶いみじうふるよ、庭ゑゞちて、おそやうふびゝしきをのこれからゝさちゝて、そゝぎもかゝるゑれとゝより入て、文をさゝいまさるこそをゝしゝれ、いと白きみちのくよ、紙ゝろき色紙のむもべさるゝへふ、ひき渡ゝける墨の、ふと氷ゐふゝれバ、すそうすふなりたるを、あけゝれ

打不ゝ忍む所ハ、文を見るゝ微笑するハ何タ書し所そとのさせ。

おもやうゝきハ、容貌のよきせ。

ぢ、いと白くやきて、結びさるまきめハ、こまぐゝとくゞりさるふ墨のいとくろう今すゝくゞりせぢふ、うらうへうきみだりさるを、うちかへし久ろうえることそ、なるゝタあらんとゝそふて見やりさるもをゝしろれまいておわゝ忍むふハ、いとゆゝしけきど、遠うみさるハ、くろき文字あどをうりぞ、さふめりとおぢゆるゝしびさひ髪長やこのふおもやうゝき人のくゝちきかどふ文をえて、火ともすわども心ちとふきゝや、火をけの火をきさゝたげて、さどくゝしげふえみさることそをゝしろと。

きらくゝしきハ威儀正しく立派なるさせ。

五大尊ハ、五壇の御修法をいふせ。

季の御法経ハ二月八月禁中にて大般若経を講せらるゝをいふ。

きらくゝしきハ　二百四十五段

大将のハさきおひさる。　孔雀経のハ讃経。　ハ修法ハ五大尊。　藏人の式部ハぜう自るの日大路わりたる。　ハ高今左太衛門佐すまぎぬやりたる。　季の御法経。　熾盛光のハ修法。　神のいさくなる打ふ神なりの除こそいみじうおそろしろれ。　左右大将、中少将などの、みゝうゝしのつらふ伝らひめふ、いとをゝしげ也。果ぬるをゝ、大将のおゝ仕せて、のぞりゆゝとのゝふらん。　こんぐんろくのハ屏風こそ、をゝちうおぢゆゝ名ふれ。　かんだゝよけハ屏風ハ、をゝしくぞ、ゆえてる。

こんげんろくの屏風ハ、坤元録の山河なとのさまをゝきさろをいふ。

かんだゝよけのハ漢書ふ紀したるゝとも

の名つきこそいふ。月次のは屏風もをりし。さて此屏風をいつるハ。きらゝくしき物ふハあらさるべし。此前脱文あるらと。ある人いへり。

月次のは屏風もをりし。

二百四十六段

火をけの火

かゝる炭がへ。ふゝおこして。物ふゝく。ゆるゝ。さむきこと。いとわりなく。おとゝがひなども。皆おちぬべきを。からうじて。炭をけ引よせさるゝ。火のおのきうて。露くろみさるゝ。ふなゝくめでさきをこまうなる。灰のふゝりおこし出さるゝこそ。いみじうつきしけれ。物あどいひそ。火のきゆらんも。をらずあるゝ。ことと人の来て。炭いれておこすこそいとふくゝれ。されどめぐりふおきて。中ふ火ををらせさるハよし。皆火をおさまふゝきやめくりふおきてハ。炭を火のまわりふおきのきせ。

清少納言まるらせてハ。白居易の格子をおろさせて也。

みをるくまきあけハ。白氏文集云遺愛寺鐘欹枕聴香爐峯雪撥簾看とある詩の意也。

猶此宮の人々ハ云々ハ。清少納言をわめて。此宮の四方ふさふらふ人なれハ。

りて。すゝをうさねおきたるいとゞきふ。火どもおきたるゞいとむつゝし。

香爐峰の雪

二百四十七段

雪いとゝうく降さるを。れいからずは格子まるらせて。すびつふ火おこして。物語などしてあつまりさぶらふふ。少納言よ。香爐峯の雪ハいかゞらんと仰せられそれで。みな格子あげさせて。みをるくまきあげされバ。笑ゑせのふ。人くも皆さるゝハ知り。歌あどふ。ほひこそよりざりつる。猶此宮の人ふハさるべきなめりといふ。

さる故ゑをも知るへきゑをもと、人々のいふを。

なほこそハ、岩崎美隆云、直こそゝすて、大方ふの意也、陰陽師の子ふていハさい當然のゑをと大方ふこそきけとを。いうけハ、決懸也、殺して、物のけなどの絶えいうたる時面ふ冷水をそゝきうけるともいへぬふ、利口ふ立走るをいふ也。

陰陽師の許なる童　二百四十八段

陰陽師のもとなるわらハべこそ、いと、おくゆかしうされ、殺ゑどもゑ出されバ、さいとんゑどふむゑ人ハふほこそきけ、そと立走まて、ゑろき水いうけさせるともいへぬふ、ゑありくさまの、例ゑり、いさゝうまふゆいをせぬこそうらやましうれ、さらん人をゞふ、つうハんとこそおゞゆを。

柳のまゆ　二百四十九段

三月ばうり、物いみ〳〵ふとて、うりそめゑ新人の家ふいきされバ、水どもなどをうゞくしからぬ中ふ、柳といひて、物のやうふなるまめう〳〵くいあらで、ゑふひろう見えてふくげなるを、あらぬゆなめりといへバ、うゝるもありなどいふゑ。

さう〳〵らふ柳のまゆのひろごりて、ゑのおもてをふする宿かな

とこそ見えしか。

くらしうねける　二百五十段

其頃又同じゆ見〳〵さやうのふふ出さるふ、二日といふひるつうゞいとゞつれゞまさりて、さゞ今もまるりぬべき心地するゆどふしも、おゆせるゆあれど、いとうれ〳〵くて見る、あさみどりの紙ふ、宰相の君いとをう〳〵くうきゑへり。

さうしらふハ、賢さちて也、春の面をハ、楊の葉の青くふくけなるハ春の面目をふこすと也。

るふ〜方をハ、猶少納言のまゝ上らさりし己前をいふ。此歌千載集の何書ふ。一条院御時皇后宮ふ清少納言始めて侍りける頃、三月斗ふ、二三日まゐり出侍りけるとあり。くらしてつらふハ、千載集ふ暮してふてふとあり。

てさくしふハ、宰相よゝり私の消息也。此君ハ、宰相をいふ。ゑゝらともハ、てうさびしきハ住まゝらと斗思ひて、后宮のはつ〜をまちて、里居し侍りしすふとの文。

てさくしふハ、宰相への返事也。

少将ふやハ、深草の少将の世話ふていつる也。早くまゐりさき心いられふ今夜一枚を待うねて、うせもやせんとの文也。

くらしうねけるこそ云くハ、あまりふうけはりたるすよとゝ、ふれ給へる也。いとふくしハ、ふくけまの涙ふらん。

たるらん物を云々ハ、歌ふふくめてある意を何ふつゝけてあらそしてある也。ふめけなからぬもハ、返事すゝく歌の作

いゝふ〜てるふ〜うゝをすぐしゝんくらし

わづらふきのふゝふうな

とふん。わゝくしふハ、今日しをちとせの心地するを、曉ぞふとゝくとあり。此君のれたまえんざるをうしかるべきをまして仰せごとのさまふハおろうならぬこゝちすれど、けいせんすとゝおぼえぬこそ。

雲のうへふくらゝうねける春の日をゑうらともふぐめつる哉

わゝくしふを、こふひのわどもゆ羽ふやなり侍らんぞらんとて、曉ふまるてまゝられバ、きのふれ返しゝくらしうねけるこそいとふくし。いみじうそしてきとおわせらるゝ。いと侘しう体ふさるすも。

こよなれ名居　二百五十一段

清名ふこをうたるころ、ひぐらしのいみじうふくをおそれときくに、わざとハ使ふてのたまをせさうしからのうみのあうゝさるふ。

山ちうき入あひのかねれこゑごとにこふるふるらん

心の数を去るものをこよなれふぐるやとかゝせぬへ残ふ

どのなめげふらぬもとり忘れさるゝびまてむ

法ふうかへるゝなきせ。蓮の花ひらハ、散花の花ひらせ、岩崎美隆云、諸本如此若くは此次ふ、少納の歌のありしゝ脱さるよや。そやハ、初夜也、一本ふ半夜とあり。

さるひの云々ハ、垂氷ふて、づらゝの軒ふ垂れさゝりしをいふ。

らちきなるそちすれ花びらふかきてまゐらも
る。

凛くとして氷ちゝり　二百五十二段

十二月二十四日、言の日佛名れそやの日等師守
て出る人を、歌ふゝもるぬらんゝし、里へと出も
しハ忍びさるふへも、歌のふど出るふもあれ、ひ
ひのりさるたれ程こそをゝしゝれ、日ごろ降つ
る雪の、今朝ハやみて、風などのいとう吹つれバ、
さるひのいみじうちぶどりつちふどこそむらゝ
くろきあれ、屋のうへハ、さゞおしなべて白きふ、
あやしき賤の屋もおもがく志て、ゐ時の月のく

うねなどおしへきハ、雪の月ふ映しさるゝ、銀をうすく拵きさるやうなりとのこと。
すゐたやうのくき、軒の垂氷の、水晶の茎のやうなりとも。

まふきふいみじうをゝしゝ、かぬなどおしへぎた
るやうなるふすゐたやうのくきふどいとまゐ
しきやうふて、ふゞくくじかく、ことさらかけわ
さしさるとゝえて、いふもあまりてめでさき
たるひふ、下すゞれもかけぬ車の簾をいとたゝ
くあげさるハ、おくまでゝしゝ入さる月ふうす色、
ゐ掛、白きなどゞもつハつぞゝり着さるうへふ、こ
ききぬのいとあざやゝなるつやなど、月ふてえ
てをゝしゝうゝ見ゆるゝいらにえびぞめれゝさ
もんのさしぬき、白ききぬどもあまゝ、山吹くれ
なゐふどきこゞしてふゐしゝ乃いと白きひきと

としきみハ、和名鈔ふ軾説文云、軾車前也とあり。

月影のもしさふさふハ、あまり明ふる故女の面恥しく月をはしさふく思ふ也

まんくとしてハ、朗詠云、八月十五夜秦甸之一千余里凜々氷鋪とある句也。

きたれぬきたれらをていみじうこがきいでさりはしぬきけうさつ方ハ、とじきみのとにふみ出されさるなど、乃ふ人のあひさらバをうしと見つべし。月新のもしさなきふうしろざまへまぐり入さるをひきよせあらそふおさきて、癸ふとをうし、まんくとしてこほりたけまといふ待を、返もくずんじておもするハ、いみじうをうしうて、数一数もなほうまゐしきみ、いくふの近くなるもロをし。

宮づゝへ人　二百五十三段

みやづゝへする人〻乃出あつまりて、君々の口出あつまりハ、里亭へいて集る也。

君々の口ずハ、我主君の口ずく。宮の内外のもしハ、一本ふ宮の内とのもらとあり。

ずめできこえ、宮の内外れもしのずども、かさみふ語里合せさるを、おのゞ君々を家あるゞまそ少こそをうしゝ〻れ。家ひろくきよげふて、おんぞくもさらせ、さゞ打かたらひなどする人ふハ、宮づゝへ人〻つゝさつゝさふを思てこそならまゐしゝれ、ほるべき打ハ、ひとふにあつまりゐて話し、人のよみこさる歌、何くれとかたりあハせ、人の文ふどもてくる、もろともに見、返ずかき、又むつまじうくる人もあるハ、情げふ打おつらひくいれ、雨などふりてえ返らぬも、をうしうもてなし、まるらん打ハ、生ず見入て、ふハんさまふして、

来らん打ハ、主君の口方へ也。

又むつまじう来るハ、うの宮仕人の許へ也。

よき人の云々ハ、宮仕人の内まるうふとふつけて、そ人の御さまのゆゑ〳〵きゝまゐしきハ、我なゝら怪しき心也、との意也、

ふまけしゝらぬえせ者ハ、一本ふ、打とくましき物のたゞめふあり

あさみとりのハ、蒼海のさま、浅緑の絹の打さるをひけるやうありとも也、

いだしてなどせぢや、よき人のおハしますゝ
ありさまあど、いとゆゑ〳〵きぞけ〳〵らぬ心ふ
やなゝらん、　　二百五十四段

えふらひするハ　　なまゝしゝらぬえせ者、
あくび、ちごども、　　二百五十五段
打とくまし〳〵ぎハ
ゐ〳〵と人ふいたるゝ人、さるハゝしとゝられさ
るようハうらふくぞえゆる、　舟のみち、日れう
らゝゝなるふ、海乃おもてのいみじうのどゝよ、
あさゝどりのうちたるを、引渡〳〵たるやうふえ
えて、いさゝうおそろ〳〵きゝしきもふきわゝき

ろといふ物ハ、榾也、

ふごゝりつるハ、和の字まて、穂なゝしをいふ、

よろ〳〵き深さハ、大方まて格別の深さなゝらぬ也、

女の、あこめぞゝうり着さる、佐ひの者の若やゝな
るもろともに、ろといふ物おし〳〵て、影をいみゝら
うゝひさるいとをゝし〳〵、やんごとふき人まも
ゐえせ奉らまゐ〳〵しう心ひいくふ、風いとうふき海
のおもてのさゞあれまゐ〳〵うふるふ、物もおぞ
えゐ、とまるべき所ふこぎつくるわど、舟ふ浪の
かけさるさまなどもさゝゝうりふごかりつる海
とも見えぞゝうし、思へバ、舟ふのりてなまく人バ
うりゆゝしきゝとのこそふゝれ、よろしき涼さふ
てゞふ、さるゝゝうふきあふのりて、こぎゆくべき
あふぞあらぬやまゝて底ひもゝらず千尋ふど

やうさハ。和名鈔ふ。唐韻云。篷庫。布奈夜加太。舟上屋也。釋名云。舟上屋謂之廬言象廬舍也とあり。えやをハ。早緒也。舟の檣ふ付る縄をいふ。

もならんふ。物をいと多くつみいれされど。ゑぎハを只一尺ぢうまざふふきに。げをどもの。いさきおそろしとも。ひたらば。走まはき。つゆあらくもせで。たづみやせんと。ふふ。大きなる松の木などの。二三尺ぢうふてまろふるを。ゑつゝつぶうゝとなげ入きなどするこそいみじゝ。やうさといふ。船ふぞおいす。されど奥なるハいさゝうさのもしをしふさてる者どもこそ。同くるゝ心地もれ。をやをつけてのどうますげたるおの弱けさよ。さえふを。伊ふうをならん。ふとおちいまをんをそれぞふいみどうふとくふ

もうのすきうけハ。一本ふもうのすうけとあり。帽額の簾をうけさる也。此方や然るへうらん。

されどひとゝうハ。我舟ハ。うの水きえ一尺斗ふ。いりさる舟と。同しやうふ重くハあらねと也。

もし舟ハ。和名鈔ふ。漢語抄云。艇。乎夫祢。游艇。波之布祢。唐韻云。艇小船也。釈名云。一二人所乗也。

あとの白浪ハ。朗詠ふ。世中を何ふさとへん朝ぢらけこぎゆく舟の跡の白浪とある歌をいふ。

どもならず。我のりたるをきうげふ。もかうのすきうげ。妻戸格戸あげふどして。されどひとしうおもげふなどもあらねバ。さゞ家のちひさきふてありてと舟ゑやるこそいみどうれ。とぼきハまことふ。笹の葉をつくりて。打ちらしたるやうよぞいとよく似さる。とまりたる所まて。舟ごとふ火ともしさるをうゝうえゆ。をし舟とつけて。いみどうちひさきふのりてこぎあるく。津とめてふどいとあれせ。おとの白浪ハ。漾ふこそきえもてゆけ。うろゝき人ハのりてあるくまじきうとこそ猶おぞゆを。かち徒を又いとおそろし。

かち路ハ、陸路也。
海士のうつきハ、潜女なといふあり。あまの水中ふ入てすなとりするを、うつきといふ也。
腰ふつきさる物ハ、むろーハ、蜑の腰ふ綱をつけて引あげしと也。
たく縄ハ、栲縄也。
をかちたる息ハ、水中ふり上りて、息をつくをいふ也。
たゆさるハ、落涙れ

けれどそれハいいふもつちふつきされバ、いとたのもしとゝふふ。海士のうづきたゝさるハうきわざなり。腰につきたるあさえかだいゝゞせんとふんをのこゞふせゞさてもありぬべきを。女ハれぞろげの心ならじ男ハのりて歌などうちうたゝひて、此さく縄を海ふうけありく。いとあやふく。うーろめさくハあらぬふや。蜑ものゞらんとてハ生縄をふんひく。取まどひくりいるさまぞ。こゝとゝりなるや。舟のたゝをれさへてをかちたるいきなどこそ。まことふゝさゞえる人ざふたゆさるゝふおとし入てさゞよひありく

をのこも。目もあやふなさまし。更ふ人乃ゝひうくべきわざふもあらぬふこそあめれ。

右衛門の尉　二百五十六段

右衛門のぜうたなる者の。えせ親をもゝうて。人の見るふ。おもてぶせなど見ぐるしうゝひけろゞ。伊豫のくふよりのゞるとて。海ふおとしいれてけるを。人の心うゞりぶましゞりけるゝどふぜ月十五日。ぞんを奉るとていそぐを見ぬひて。乃令ゝざ事。

わゝつうみふ親をれーー入てこのぬーのゞんする見るぞあをれなりける

ぞんを奉るハ、宇蘭盆供をいふ也
このぬしハ、此主ふ子たる物とそんさり。ぞんするハ、盆の字音ふ。人を水ふお

とす音をいひよせさうと或人いつり、いとをかし、一本ふいとをらしとあり、小野殿の母上ハ、右大将道綱の母也、

とゝみぬひけるこそいとほゝゝゝれ、

斧の柄　二百五十七段

又小野どのゝ母うゝこそハ、普門寺といふ所ふ八講ゝゝるをきゝて、又乃日小野殿ふ人ゝあつまりて、なそびゝふみつくりけるに、

さきゞこるすハきのみふつきふゝを今日をものゝえこゝよくたさん

とゝみぬひゝんこそめでさゝれ、こゝもとそうちぎゝふなりぬるふめり、

いふゝゝ見まゝくとのゝ　二百五十八段

又業平ゞ母乃宮の、いふゝゝ見まゝくとのゝ入る、い

萩こる云々ハ、猩婆品の拾萩没食のゆ也、即ち昨日の八講すみしをいふ、下句ハ王質ゝ故ゆふよりて、今日の遊ひの面白きをいへり、さて斧ふ小野をそへたり、此歌拾遺集ふ見えて、下句いさ斧のゑをこゝふくさんとあり、

こゝもとハ打聽ふハ、此段ハ、人の歌ともうけれハ、閑書のやうなりたりとも也、

いふゝゝ見まゝくハ、古今集ふ伊豆内親王の歌老ぬをハさらぬ別もありといつハいふゝゝ見まゝくをしき君哉とあるをいふ、

引あけてハ、業平の母の文を引開きて也、

ふみともむハ、詠吟せすして只河ふいふ也、

みじうあそれふをゝらし、引あけて見さりゝんこそひやらるゝ、

げものの歌うたふ　二百五十九段

をゝらゝと沓ひゝ歌ふどをぢうしふゝきておきたるふげものの打うゝひさることそ心うけをふみふもふむゝらし、

げものの人をむる　二百六十段

よゝゝき男をげもの女などのをめて、いみおうふつゝらしうこそおをすれふどいへバ、やゞて沓ひおとされぬべし、そゝらるゝハ中々よしげもををめらるゝハをんふじふわゝし、又をむるまゝふ

物をバ、濱臣云、をハよふ通ふをよこ、物よの意也、をハ助辞よていと軽し、

いひそこなひつるねをぞ、

大納言殿　二百六十一段

大納言殿まゐりぬひさ、ふみのすなどそうしぬふふ、伊の歌いたうふけぬるバ、出ぬなる人く一二人づゝうせて、出屏風きちやうのうゝろあどふ、みかゝくるをふしぬるバ、たゞ一人ふありて、ねぶさきを念じてさぶらふふ、うしよつとそうするせ、あけ侍りぬなりと猶ごつふ、大納言殿、今さらふおゝとのごもをれたをしまするとて、ぬべき物ふもおぶゝしさらぬをうゝて伊ゝふさ申しつらんと思へども、又人のわらバこそいまぎるも

とゝひとりハ、清少納言一人也、

今更ふ云くハ、一条院ねふらせ給ふをとゝむる也、

うゝて何しふハ、清少納言の明侍る也と猶こちしを後悔せる也、

せめうへのは、昔の柱ふふりかゝ、ぎてすこしぬぶらせぬへるをうれ見奉るをゝ、今えあけぬるふかくおゝとのごもるべきるゝハと申させぬふげふなど宮れおまへふもわらひ申させぬふもちらせぬるわどふをさめゞとらえれ、座ををとらへてもちてあす里へいゝんといひてかくしおきたりけるゞいゝゞゝん、犬乃見付ておひけれど廊のちきふまげいきておそろゝうなきのゝちるふ、皆人れきなどちぬ也、うへも打おどろゝせおをしましていゝふあをつるぞと尋ねさせぬふふ、大納言殿の、殿ゐ上のねぶりを

をさめう童ハ、長女の子なとの意也、

殿ゐ上のハ、朗詠ふ、鶏人暁唱殿ゐ上

王之眠とある巣をいふ也。

人よべばハ従者をよぶ也。

おるゝハ伊周公の河ゐて清少納言退出するゝと也。

遊子猶云々ハ朗詠ふ佳人尽飾於晨粧魏宮鐘動遊子猶行於残月函谷鶏鳴と

おどろきといふ待を。さうゝ打出しぬへる。めでたうをゝしきふ。ひとりねぶたゝりつる目もおやきふなりぬ。いとゞきれのすゝなと。宮も興ぜさせぬふ。猶ゝ新ることそめでたゝれ。又の日たゝるれおとゞふいらせぬひぬ。殿中ぢゝりふ。廊ふ出て人よべば。おるゝゝ。我おくらんとのみへば。裳ゝらぎぬハ。屏風ふうちかけていくふ。月のいみじうあゝくて。直衣のいとたゝろう見ゆるふ。ちゝぬきれなゝらふとくゝまれて。袖をひゝへそたふるなゝといひてゐておをするまゝに。遊子猶のごりの月ふゆけぢとずんじぬへる。又い

ある價島ゝ暁賦の句也

みじうめでたし。ゝやうのるめでまどふとて笑ひさまへど。いゝでゝ。猶いとをゝしきおをべ。

二百六十二段

ふどれ

伯都の君れ伯めのとのまゝと。みくしげ殿のみつぼねふゐゝれバ。をのこある。板ぢきのとちゝくゝゝきて。ゝらい目をゐさぶらひつる。雅ふゝいうきへ申しちぶらハんとてなんとなきぬバかりの々しきふていふ。何るぞととへば。あゝらさまふおへまゝうたりしまに。きたふく伯る所のやけ伯ゐるあゝふ。日ごろをがうふれやうふ。人の家ふゝをさしいれてなんさぶらぬゝ

蜘蛛者也とあり。

ふとのさへハ、夜殿と淀野ふそんなる也。

まづゝさのみまくさつゝて作りける家よりかん出まうで来て作る也。只垣をへだて、作もだふどのふねて作りける童べも、おとゝやけ作りぬべくふん、いさゝゝ拍もとうで作らずふどいひをる。みくゝけどのも聞給ひて、いみゞう笑ひなふ。

みまくさをもやもバゝりの去れひまよどれ
ちへなど残らばるらん

とゝきて、見をとらせゆへとてなげやきバ、わらひのゝちりて、はおもをる人の家のやけたりとていとほしゞゝりて給ふめるとてとらせされバ、何のゝさんおやくみゝ作らん。拍いくらバゝりふゝといへバ、まづよめかゝといふ。いゝでゝかさめもあきつゝうまつらでハといへバ、人ふも見せゝ。只今めせだとみてうへをまるるぞ。さバゝりめでさき拍をえてハ、何をゝ出ふとて、皆わらひまどひくのぶりぬれど、人ふやゑせつらん。里ふいきて、いゝふ腹たゞんあどゝ出ふふまるりてまゝのけいすきだ。又わらひさわぐゝ出ふふも。ふどゝく拍ぐるわしゝらんと笑ハせゆふ。

女親なくありし男　二百六十三段

男ハ、めおやふくなりて、親一人あるいみじくお

何のゝさんおやくみゝ作らん。拍いくらバゝりふゝといへバ、まづよめかゝといふ。いゝでゝかさめもあきつゝうまつらでハといへバ、人ふも見せゝ。只今めせだとみてうへをまるるぞ。さバゝりめでさき拍をえてハ、何をゝ出ふとて、皆わらひまどひくのぶりぬれど、人ふやゑせつらん。里ふいきて、いゝふ腹たゞんあどゝ出ふふまるりてまゝのけいすきだ。又わらひさわぐゝ出ふふも。ふどゝく拍ぐるわしゝらんと笑ハせゆふ。

女親なくありし男　二百六十三段

男ハ、めおやふくなりて、親一人あるいみじくお

云。按江次第賑給の条當日大使於便所短冊加封。或散短冊。定便所分給之。寛平病者。貧者等也云々。されバ人ふ物賜ふとてハ、まつ短冊ふその物数を記して其人ふあさへしふと見也。此もさるふある故。此男の物賜るふゝうて。短冊そと思へる也。

かゝめもあきつゝうまつらでハ片目もあゝていと也。此男笑筆あるふを云

おやひとりハ父のみ一人のさも。

ゐつらえしき北の方ハ、さかなき継母をいふ。

故上ハ、なくなりし実母をいふ。まらうとゐもハ、一本ゐまらうとゐもとあり。

ゐあそびなとのゐときハ、管絃なとのゐ遊の相手也。

もへども、わづらはしき北の方の出来てのちハ、内ゐも入られぬ、さうぞくゐどのゐハ、めのと、又故上のくどもゐどもゐてせさす。西東の對のゐどふ、まらうどゐもいとをゐしう、屏風さうじの繪を見所ありてすまひたり。殿上のゐどらひのゐどゐをしゐらず、人くもおもひさうへゐもゐ々しきよくて、つねゐめしつゝ、ゐあそびゐどのゐたきゐいおぶしめしたるゐ、特つねゐおぶゐしう、世の中心ゐあをぬこゝちゐて、すきゐゐきゐ心ぞかとなるまであるべき、上達部の又ゐきゐもてかしづゐれたるいもうとひとりある

定澄僧都云々ハ、一本ニ、四段のことゝとなる物といふ段の末ニいりたるをゝしとすべし。

祝なともゐけてハ、彼男の二心なきを、父の遠江守も神ゐけて誓ふと也。いがゝいふへきハ、かやうニ男ハあらゐふをいゐゝいえんと淺少納言ニ相

バゐりニぞ、ゐふるすをも打語らひなぐさめ所なりける。

定澄僧都　二百六十四段

定澄僧都ニうちきたなし、すゐせい君ニあこめなしといひゐんもこそをゐしゐれ。

とゐつあふこ　二百六十五段

ある女房の、遠江守の子なる人を語らひてあるゞ、おゐじ宮人をうしらふと聞て、恨ミゐれバ、祝ふどもゐけてちゐをせゐふいみじきそらごと也。爰ニぞニゐんぞとあんいふいゐぐいふべきといふときゝて、

淡せ〜也。
ちゝへ君云々ハ。彼女房ニかたりてよめる也。ゝゝゝけてハ。遠江守を紳ニそへ。そまなの樗を端ニいひゝゝゝる也。
駒のいゝ〜う走りゝるハ。駒さゝきせ〜と也。

ちゝへ君遠つ淡海れゝみゝけそむげニたまふのそ〜んざりきや。

二百六十六段

はゝ〜り井

びんふき所ニて。人ニ掬をいひゝるニ。むねのいみゝうそ〜をゝる。ふゝかくいあるといひゝるいらへニ。

逢坂ハむねのゝつねニそ〜を井のゝつくる人やあらんとおもへゝ。

まことや。下野ニゝるといひゝる人ニ。おもひゝゝこのゝゝらぬ山のさせも草誰ゝいゝゝきのさとハつげ〜ゝ。

ゝを火ニそへて。させも草といひさて伊吹の里ハさ〜も草ある所あれいよせて伊吹ニ掛ゝゝ云ふとゝけ。里ニさやうニハのゝをそへたり。伊吹里ハ。美濃近江の堺なるニハあらに。下野國なり。おゝうゝゝハ。海賊の織物などゝの裳をいふなるべ〜。
ゝびらハ。褶ニて。延喜式ニ。覆袴之衣也とあり。
ゝゝざみハ。汗衫ニて。童女の装束也。
見さめこゝなく見さめすと也。

まことや云々ハ。抄本ニある女房の遠江守の云々の上ニあり。今方歳本ニ従ふ。
思ひゝゝニ云々ハ。思

からきぬハ　二百六十七段

あゝぎぬ。ゝゝびぞめ。もえぎ。さくゝゝ。すべてゝうもいゝの類。

裳ハ　二百六十八段

たゝうみ。ゝゝびゝ。

かざみを　二百六十九段

裏をつゝゝ。桂。ゝゝハ青くちゝ。桂袴。

おゝ物を　二百七十段

紫。ゝゝろき。もえぎニかゝりたる。ゝゝ桂も

ゝけをゝも。桂ゝんざめこゝなく。

ゝんハ　二百七十一段

くさつうさのゆさけ着さるハ、片方の行長ゆたりユさちたる衣也。

むねなともきれてハ、片方へひられて胸あらぬをいふ、ませてきるハ常のとゆさなるとを着交へすと也。

ところせうめりハ、左右ゆさなるハひろこりて也。

うさもうま一本ユ、かさつ方とあり。

あふひ　うさだこ。

きぬの着ざま　二百七十二段

友うす掐うさつうされゆざけ着さる人こそふくゝれど、あまさうさね着されぞひられてきユくし、綿ふどあつきハ、むねなどもきれていとへぐるしまぜてきるべき掐ユいあらず、昔ふりさまふくきたるこそうるを、左右のゆざけなるハふし、そもも昔女房のさうぞくユていハ、ところせうめり、をとこのあまさうさぬるもうさだうまおもくぞならんうし、きうらなるさうぞくの掐り掐うもものなど、今ハこなさこそあめを、いかさちふき云々、美隆云、按辰本ゆハ似けなき物の条ふあり。

殿ゆふて云々ハ、殿ゆふさいすつうさとて、諸法度違背れ繁をたゝも官ゆれハ人愛すくなく形ふき君達ふハ似あたすと也。

宮の中掐ハ、一品式部卿為平親王二男源頼定也。

まやうに、又さまふき人の着給ふん、いとびんふきぞうし、かさちふき君達の、殿ゆふておいまる、いとへぐるし、宮の中掐ふどの口をしうりしうな。

やまひハ　二百七十三段

むね、掐のけ、掐しのけ、さゞそこをうとかく掐くをぬ、十八九ぞうれ人のかみいとうるそしくて、さけぞうりすそふさやうなるゞ、いとふくこえていみゞうをちろう、顔あいぎやうづきふしとそゆるゞ、歯をいゝゞくやみまどひて、ひさひ髪もちとゞふなきぬらし、うゝれこゞれ

ゐかしひハ、涼く思ひいらす、さゝ一ゑたりなるさなり。

ふるゐもハ、さし寄るゐもせ。

物つくゝとておきあうりハ、抄ゐ物の元

ゐゝるも赤らぢおもて赤くておさへゐさるこそをゝしくれ。八月ぢゝり白きひとへ、ふよらゐなるたゝまよきゐどふて赤をんのきぬのいとあざやゝなるを引ゝけて、むねいみどうやめだ、友ぢちの女房さちゐどがたるゝ赤つゝいといとをしきゑざゝゐ例もゝくやゐやみめゐゐどゐ、ゐびふとふ人もあ至心ゞけさる人ハ、まことふいみゞとおもひゐぞき、人ゐれぬ中なゞたゞまゝて人めゐひて、ふるゐも近くもえゐらず。ゐひなゞきさることをゝしくれ。いとうるたしくゐき髪を引ゆひて、物つくゝとてたきあゞりたる

来るとおとろき起きしせとあるを、美隆云、下ふ淺経の僧云々とあるハ、注の如くゐもきこゆれと、猶てゝハ呕吐せんとまるさまをいふといへり。

めをくはりつゝハ、淺経の傍の、女房の方ふ目をつくるをいふ。

さゞ今の人ハ、當時出頭の人の意也。ゐくしとろふ人ハ、思ひぬ男也。さておしてゝうりことうちしハ、其男の、女を二心ありなと推量して恨むせ。

るけゝきも、いと心ぐるゝくらうゝさげなり。うへみもきこゝめして、ゐどきやうの傍れ殺よきゐをせゝられバ、とぶらひ人どもとあまゝ見えきて、強きゝふどするも、かくゐなきふめをくだりつつよみゐさるこゝ、罪やうらんとおゞゆれ。

心づきゐきとの　二百七十四段

物へゆきちへとまうづる日の雨、つゝふ人の我をバおゞさず、何ゞゝこそ、さゞ今の人ゐどいふを、ゐのきゝさる。人よりハ特すこゝふくしとおもふ人の、おゝゐゝりるうちゝ、すゞろなる物うらみし、我ゝゝこげなる。心あゝきひとの、

心あーき人のハ、一本ゐ心あしきめのとのことあり、それゝつみゑもあらねとハ、乳母ゝそあれ、養それたる子ふとかゝふゝれとのこと也、

あまゝあるゞ中ゐ云々ハ、乳母の詞也、もとめてハ、其子の心あーき乳母とも志らて、なつゝしゝり求むる也、

ゑびしくふくき人ふ云々ハ、我ゐいひよるをゑびしく思く思ふよ、いとひてすけなくいひそなてと猶艱難なるさまを見するゝ心つきゐしと也、

やーゐひさる子、さるハそれゞつゝゐもあらねど、かゝる人ふーとおぞゆるゆゑゑやならん、ちまゝあるゞ中ゐ、はきゝをゞゐひおとーゆひてや、ふくまれゆふゑゐどあらゝゝふいふ、ちごハゐひも志らぬゐやならん、もとめておきまどふ心づきゐきなめり、おとゐふありてゑゐひうーろみもてさゑぐゐどゐ、中々ゐるゐこそ多ゝめれ、ゑびーくふくき人よ、おもふ人のたしさふくいへど、そひつきてねんごろゐる、いさゝゝ心あーゐどいへバ、つねゝもちゝくふして、おくをせいとほーゐり、さゐゐとふくゐひさるゐまつゝれついせうし、とりもちてまどふ、宮づゝへ人のもとゝきゐどする男の、そこゝておくふこそいとわろゝれくをする人もいとふくし、ゐハん人の、まづなど心ざーありていをんをいみたるやうにロをふゝぎて、顔をもてのくべきふもゐらねバ、くひをるふこそゐらめ、いみどうゐひゐどーて、わりゐく夜ふけてとまりさりとも、更ふゆづけゞふくをせじ、心もなゝりゝりとて、こずゑさてふん、里ふて北おもてよりゐ出ーてハいゝゞせん、それゞゐ程ぞゐる、　初瀬ふまうでゝ、つゞねふゐるゐ、あやーきげをどものゝ

ゐをん人の云々ハ、是ゝり其物くふ故を知ーゐりてくをする人もふくき故をいふ也、

こずバさてなんハ、ゐつけさふふるまをす、心なき女と見ゝきりて、来すなりふバ其ゝりてありなんと也、

里ふて云こハ、宮仕所ならて、里亭あとの北の壷所なとよりゐ出して、物くはせんハ名ゐのすこしも也。

うしろさしませつつハ、背中を家ふ交へて也。

くれてをしハ、櫛橋也。初瀬ふあり。

この虫のやうなる者ハ、下ものありさまをいふ。

前さらへハ、ゐをおひ拂ふ者也。

よろしき人ハ、やことふきまてふハあらで中へんの程をいふ。

しろさ〜まぜつゝ居ふこさるゐしきこそないぐ〜ろふと、いみじき心をおこ〜てまうでさるふ、川の音などのたそろ〜きふくれをしをのぶりごうぐていつ〜〜ゝ佛のはゝかををぐみ奉らんと、つぶねよいそぎ入さるふこの虫のやうふる者の、あや〜ききぬ着たるゐいとふくき、さちるぬゝづきさるハ、お〜さふ〜つべき心ちこそすきいとやんごとふき人のつがねぞゝりこそまへをらひあれ、ゐろ〜き人ハせい〜わづらひぬゝし、さのを〜人の師をよびていをすれバ、そこどもすこ〜されふどいふゐどこそあきゐゆそことも、其方達也。

あもこ出ぬれハ、宿坊のあもみ退けハまさもとのやうなりと也。

ついてのまゝふハ、次第をたゝへにと也。

おとなふ然たる子の云くハ、成長の子也。よゝらぬすきゐするをきゝつけて、親の吳見するふ直面ふハいひふくしと也。

家の君ふてハ、一家の主ゐても也。

み出ぬれバ、同じやうふゐりぬ。

いひふくきさとの。　二百七十五段

人のせうそこ作せごとなどの多ゐるを、ついでのまゝに、をこじめゐりおくまでいといひふくし。返事又申しまくし。をづゝ〜き人の招おこせたるゐへりる。おとふなりたるゐの、ゐをぞふるゐきゝつけたるまへふていいといひふくし。

男女の志な　二百七十六段

四位五位ハ冬、六位ハ位え反、とのゐる姿ふども、志ふこそ。男も女もあらまゐ〜きるゐふめを、家の君ふて

それたふ云くハ、一家の内ふてさふ其衣服の品の吟味ふきハ、他所の使者なとの物見ちりたるハ、とらく批判し沙汰もべしと也。
猫の土ゐおりたるやうふてハ、衍文ふるべし、或本ふハ、此河の下ふ二文の頼かき物といふ所ふある人の顔ふとりとき〻ふしと見ゆる所ハといふより
まもらる〻こそとびしけもといふ迄ハ七ちらきつゝけたり
ちる物ハ、汁物也、
あてせをハ、和名鈔ふ霾、四聲字苑云郎

秘反洲安不、一云阿倍毛乃、搗薑蒜以醋和之とあり、抄ふ、世ふいふさいといふ物也とあるハ、ちろし、
物ものハ、膳の飯也、もさいなハ、分体ふきふを也、
こと人とものハ、うさをちなる人の也、一説ふ、こと人と物いひまきらゝすとふあり、

ちるふも、雅らハしふしあ〻をちざむる、それざふ物見知さる使ひ人ゆきて、おのづからいふべらめり、まゝてまどらひまる人をいとこふふし、猫のつちる物をさるやうふて、

たくみの物くふ　二百七十七段

さくみの物くふこそ、いとあやゝ〻れ、寝殿をさて、ゝ東の對ざちたる屋をつく〻とて、たくみども居ふこて物くふを、東おもてゑ出ゐて見れば、まづもてくるやおそきと、ちる物とりて皆のみて、かをらけをつゐをつゝ、つぎふあをせをみふくひつれば、物のハふそうふめりと見るや

どふ、やゞてこそうせふゝ、二三人ゐさりし者、皆させしうバ、さくみのさるふめりと云ふせ、あふもさいふのるどもや、

物ぐさりせよ　二百七十八段

物ぐさりをもせよ、むゝ〻あゞたりもせよ、ちらしふいらへうちゝて、こと人どものいひまぎらハせ人いとふくし、

有明の月のありつゝも　二百七十九段

ある所ふ、中の君とゝやいひける人ハもとふ、君を心ふハあらねども、を心いさくすきたる者ふいを心をせふどある人の、九月バかりふいきて、

言の葉をつくして
ハ男のさまくいへ
る也。

みゝの月の云々ハ
拾遺集ふ也月のみ
ゝの月のありつゝ
も君しきまさハ我
恋めやもとある歌
也。

かみのかしらふも
云々ハ月影の女の
頭のあたりまてハ
さしいらて五寸も
ゝりてなるさまてさ
したるさまも也さら

みゝの月のいみドうてゝりておもたろきふ名残
おもひ出らるとんと言れ葉をつくしていへるゝ
今ハいぬらんと遠く見おくるわどふえもいを
ぜえんなるわども也出るやうふ見せてさちゝへ
りさておとゝとゝ所いさる陰のゝゝふそひ立て粧
ゆきやらぬさまもいひたらせんとおふふよみゝの
の月ハありつゝとと打いひてさ〳〵のぞきたる
うみのゝ〳〵らふもよりこず五寸だゝりさゞり
て火ともしたるやうふる月のひゝり もよわさ
れておどろゝさるゝ心地たゝれだ やをらさち
いでふゝりとこそ語りしゝ

りてハ避也一本ふ
さしのそきたるか
しこゝり五寸計を
さりて火ともした
るやうなる見とあ
り。

心よそひふ云々ハ
ゝうみおたをもらん
と用意せしと心よ
けふいひて車をか
しおこせたると也
下ざまふうちいひ
てハ牛をいゝくい
ひくさしふくむ也
をのことともハゝう
たる車の車そひの
男とも也
主の心ハ車の主の
心よけふいひさ
るものゝ猶不清ふ
りしふらんとおし
ゝりたられさり

牛かひ

女房のまゐりまうでするふハ車をゝるわもあ
るふ心よそひたるさるゞわふ打いひてかゝたる
ふ牛ゝひわらたの例のゝ〳〵ゝりもたもざまふ
うちいひて いさうをしまうつもあふうたてと
おゞゆゝし をのこともふどの拍むづゝ〳〵げふ
るゝしきふて いゝで夜ふけぬさきふおひて板
りふんといふ ふほをれ心おゝハゝられて と
ゝれるなりと 又いひふをんともおゞえゞなり
とほのあそんの車のみや衣ふゝあゝつきわゝ
ず人のみるふ いさゝゝはるゝふゝりそん よく

二百八十版

と也。
とこのゑふりと云々ハ。急用ふも。又と車ゐるゑいそんとハ思そすと也。
ふくそをゝ〜へ云々ハ。下人をふくいひつけさりしと也。ふくそハ。ふくこそのこ文字おちたるゐる也。
おきさるふのふ文字ハ。と文字のあやまりなとふや。

ぞをゝ〜へふらハせたりしゐ。たふあひさりける女車の。ふゐき呼ふおとゝいれて。えひきあげて。牛ゐひの腹だちゐれバ。我ゐ浸者ゑてうたせさへゑれバ。まゝして心のまゝにいまゝめおきたるふゑえてさり。

宿ぜみする人　二百八十一段

すきゝゑくて宿ずみをる人の。ふるハいづらふありつらん。曉ふ雨ふりて。やゐておきさる。まゞぬぶたげなるゝしきゑれど。硯とりふせ。墨こまやゐふおゝ〜すりて。ことふしびふまゐせてゑどハあらず。心とゞめてゐくゝまひろげ姿をゐゝうゑ

ことふしひふ云々ハ。涼く心もとゐすして。世の常ふまゐせて。ザツとゐくふ

ハあらものさも。まひろけ姿ハ衣ゑとのつま裾の打ひろゐりて。とりつくろそぬさま也。
演臣云。按安のもとより。衣をかりて来たりしをゐつすふらんゐといへり。
かきたてゝハ諸本ふかきたてゝとあり。
おくの方ふ云々ハ。を水めせ。粥きこしめせなといふ也。

ゆ。ゑろききぬどものうへふ。山吹くれゑゐなどをぞ着さる。白きひとへのいたくゑゞみたるを。うちまことりつゝかきさてゝ。おなる人ゐもとらせず。わざとさちて。こどねり童れつぎゝゑきを。身ぢゐくゑびよせて。打さゝめきていぬる後も。久〜くなゞめて。經のさるべき所々ふど。ゑのびふゑゐたり。おくのゐゝふはてうづかゐふどして。そゞのゐせゞ。あゆゝ入て。ふづくゑふおゝかゐまて。文をぞゝる。おとゝゐろゐける所々ハ。うちずんゞたるといとをゐゝ。をあらひて。直衣バゐりうちきて。ゐくをぞ拭ふふよむ。まことにい

ろくをそハ禪録をいふ也。

うちけしきえめハ、使の小舎人童の、ろ〳〵りさるをにくゝハいひもやらず、其けしきを見する也。いとわしけをハ美隆云、法花皆かくあれとをろしけをの誤なるべし。

同じ空ふてハ、馬上のまふ、立文をさゝくるさま也。

と尊ときゝどうちちうき所ふるべし。ありつる使うちゝ〳〵しきぞめバ、ふとよみはして、返事ゑ心入るゝこそいとほしゝれ。

二百八十二段

結げなる人

結げなるゑうき人の、直衣もうへのきぬもうりぎぬもいとこゝてきぬぐちふ、袖ぐちあつくゑえたるゞ、馬ふのりていくまゝにともふるをのこ、さて文を同をそらふてとりさるこそをゝしれ。

二百八十三段

ねのけ

ねの木ぐち高う高ひろき家の、東南のかうしど

ゑらふさハ、園屋也。

千手陀羅尼ハ、千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿无礙大悲心陀羅尼経といふもの一巻あり其中今真言家ふ聲明とする所をいふ也。

いたうなやむ人ふやハ、一ゑふいとうなやめハとあり。うつすべき人ハをき人をいふ也。とこハ、独鈷也

も、あげわたしされバ、涼しゝゞゑすきて見ゆるふ。母屋ふ四尺のれ帳たてゝ、おふわらふゞをおきて、三十餘バかりの僧の、いとふくげふらぬゞうをずみの衣、うちをれけさなど、いとあざやゝゑうちちうぞきて、かうぞめの扇うちつゝひぜんず陀羅尼よみるさり、ねのけよいたうふやむ人ふやうつすべき人とて、おみきやゝなる童の、ゝみふどうるハしきすゞしのひとへ、あざやゝふるをゝうまふゞくきふして、ゐざり出て、よこざまふとてる三尺のれ帳のまへふゐるされバ、とざまよひねりむきて、いと面うふやゝなるとこを

をゝとは、一本ふうちをうみてとあり。目うちひさきてハ、万歳抄ふ目をふさきて也。ひふ相通也といへり。

とらせて、をゝと同うちひさぎてよむだらふもいと尊とゝ。けせうの女房あまたゐて、つどひまもらへてより、久ゝくもゐらでふるひ出ぬきバ、もとの心うゝなひて、おこゝふふまゝにゝさがひゐへる護法もげふたふとし、せうとれうちきしたる。ゐそ冠者どもなどのうゝろふゐて團扇をるもあり。皆尊がりてあつまりたるも、俗の心ふらバ、いゝよもづゝとまどハん。みづゝらハくるしゝらぬるとゝりふぐら、いみゞうこびふぐきたるさまれ心ぐるゝさをつき人のゝり人などをゝらうゝくおがゝえて、ちやうのもと近くゐて、

護法も云々ハ、一本ふほとけのけんもいとたふとしと見ゆとあり。又一本ふ、行ふよゝゝうひて調せらるゝ佛の心をゝを見るふも、いと変としとあり。せうとのハ、物のけふなやむ女の見也。團扇するハ、彼僧をうちそよそあふく也。俗の心ならハゝゝ

のよりまゝしの量の現心よてあらハ也。みつゝらハゝゝ加持ふ、よりまゝしの調せられ苦しむハ、怨霊の苦しむよて。其童女の苦しむよハあらぬと知りかゝらのさゝ。つき人ハ、霊ふ煩ふ人也。

ふろしとそハ、霊気さりて快気とて也。えんも引さけハ盤よて、おもゝの膳を引ゐる也。

きぬひきつくろひなどするゐどふ、よろゝとて、ゐゆなどわおもてふとりつぐゐどをも、わゝきくゝい心もとふしだんも引さげふぐら、いそいでくるや、ひとゝへあどぬけふうす色の裳ふどなえゝゝまてハあらず、いと清げせ、さるれ時ふぞいみゞうことわりいをせなどしてゆるしつきちやうのうちふとゝそゐひつをおさまゝしうもいでふゐる哉、いゝなるゐまつらんとゝづゝらしぐりて、髪をふりゝけてすべり入ぬれバ、ゐバしとゞめて加持すこしゐて、いゝふちをやゝふ物ぬへりやとて、ゐゐみさるも恥ゝしげせ、ゐバし

むする也。九帳のうちふ云々いらのよりましの心也。あさまーうもの下。一本ふ。あらをふとあり。時のわとい。俗時のおとなひすべき程ふなりしと也。ほうちく。美隆云ほそちの誤歟ほそちハ熟瓜也。いうとうハ谷川氏云。小豆をもて餡餅を煮物也。といつり。又按ばうぞうの誤ふいあらぬう。橘廷亮云ばうぞうハ。菓子雜ふて今の雜煮餅のゆ也といつり。又按尺素往来ふ。餅餡ハウとい

ちぶらふべきを。時のわどふもなり侍らぬべけれどとて。まろり申して出るを。ちばしほうちをうたうまるらせんなどとぐむるをいみじういそげバ。所よつけゝる上臈と知ぶーき人。簾のもとよりゐざり出でいと嬉しくたちゝらせのつりつるちるしふいとさへぐたくゐひ孫へらきつるを。唯今おこさるやうふ侍れど。返もゞくあん悦びきこえさする。あすもいとまのひまふい。拙せさせゆへなどいひつゝいとちうねきゐ拙のけふ侍るめるを。さゆませゆそざらむあんふく侍るべきゝろしく拙せさせのふなるをあん悦び申し侍ると。何ずくあよて出るいいとるときふ。佛

ふもの見えなりといつり

いとうれーく云々ハ。上臈の何也。いとちふぬき云々ハ。彼侍の何也。

こゝうしこふハ。験者ふても。学匠ふても。方々ふ出頭なるハのさま。法師も云々ハ。法師も時ふあふハふしと也。一本ふ。あらまほーけなるふさちれとありて。おやなと以下の文なーのけくひハ。のけえりふ着さるをいふ。

のあらハきたまへるとこそおぞゆを。

やごとなきおぞえ　二百八十四段

きふげなる童のゝみながき。又おぞきやゝなるがひげおひたれど。おもをずふかみうるハーき。又ちゝゝふむくつけゞふるなど多くて。いとかげよて。こゝかーこよやんごとかきおぞえあるこそ。法師もあらまぞしきわざかめきおやなどいゝふ嬉しからんとこそおーをゝらるを。

見ぐるーきぬ　二百八十五段

きぬの背ぬひゝうよせて着さる人。又のけくびちたる人。下すぎきさなげなる上達部の

れいならぬ人の前ハ心ち煩ふ人を見まゐるのこと也。

今やうの者也ハ昔こそあれ今やうハさやうのゑまゝありと也。

法師陰陽師ハ法師から陰陽師ふて被なとする也。

かみうゝふりハ烏冠也。

御くるま。れいならぬ人のまへゐ子をゐていきたる。をうま着たるゝらハの。おゝぎたきさる。それいいまやうの者なり。つぼけうぞくたる者の。いそぎてあゆみさる。法師陰陽師の。かみうゝぶりたてたらへしさる。又色くろうやせふくげなる女の。かづらたたる。ひげゞちふやせ〳〵ふる男とひるねしたゐかゐの見るゝひゐふしさるゐゐらん。ふるゐどいゝさちもゐえぞ又おゝふべてけるゐとなりゐされバ。我ふくげあゝとておきゐるべきゐもあらずゝし。つとめてとくおきいぬるめやもゝ。又ひるね

つやめきねされハ眼のあゝりもりあゝめてまゐちのたれをみたるずべてねおきのさまも。ほゝゐゝみハ。正しゝらすくつる〳〵さまをいゐ也。いけるゝひなきよハ。ねゐきらゐの見くるゝきゐ依て也。のしひとへハ紅のうちなる衣也。ゐぞのとゐりハきぬの単ハ。腰のすきとゐりてゝくゐゐる故。のしひとへゝゐくるしきゐやゝ也。

枕くらゝ云くハ。夕

去ておきたる。いとよき人こそ今すこゝをゝ〳〵それ。えせゞ〳〵ちハ。つやめきねされて。ゝうせずバ。ゐ〳〵ゐゞみも去つべし。かさゝる見ゝハゝらんゐどのいいけるゝひおさよ。色黒き人のすずしひとへ着たるいと見ぐるゝこゝし。のゝひとへもおゐじくすきされど。それハゝさはゐも見えぞゐそのとほりされバゐやゐらん。

二百八十六段

枕くらゝなりて文字もかゝきぞなりたり。筆もつゝひたてゝ。見をゝきてゝや。はさうしハ同ゐ見え心よ枕ゐふすを。人やを見ゝすると云ひ

暮あとのわざをいふなるべし。以下跋文ゝて。此草紙をかけるよしをいへる也。

人やハ見んするハ。人の見る物ならバこそ遠慮もせめ。人の見るへきおもふらねハのさ也。

きゝうかくしハ。サツパリとかくしたりといふさ也。

涙せきあへぬこそハ。古今集ふ枕より又ある人もなき恋をなみとせきあへすもらしつる哉とあるふよれるふて。枕草紙と云名よつきて。世ふもらす心を。彼歌をおもひて。つもゝ〳〵なるさとゐれわどふ[illegible]の一ゝめさるを。あいふく人のさめ。びんふきいひすぐしふどもつべき所〳〵とあまゝ。清うかくしたりとおもふを。涙せきあへぬこそありふゝれ。宮のおまへふ内のおとゝぶのきりぬへりけるを。これふ何をこのゝまゝ〳〵うへのおまへふハ史記といふふみをかゝせぬへるなどのたまはせしを。枕ふこそハ志侍らめと申しゝうバ。ちをえよとそのたまはせたりしを。あや〳〵きをこよや何やとつきせず。多うる哉のうずをうきつくさんとせしふいとあはおぼえぬるぞおろかるや。大うゝ見ハ。世の中にをかけるなり。宮の御ふふ云〳〵より。此草紙をかきし紙の由来をいふ也。枕ふこそハ。身をなたすまもらんとのさをよせていへるなる歟。

さて〻えよハゞあらハ。清少納言ふ其紙をえさするそと。后宮のおわせらるとて賜をりしとゝ。

あやしきをこよや一本ふ。こしやとあり。抄ふ怪しき故事やのさ也といへり。

美隆云あやしきをこるやゝて。をこかましきるのさ也といへり。

人なみ〳〵ふ云〳〵ハ。

うしきるを。人のめでさしふどゝふべきる程えう出で歌などをも。木草鳥虫をもいひ出したらべこそ。ゝふわどとりハわろし。心見えありともそしらもめ。只心ひとつふおのづゝら思ふるをさてふゝとふ出つけたれバ。抱ふさちまじ。人ふみ〳〵なるべき耳をもきくべきおゝさと出ひしふをづゝしきなども見る人をのたまふなれど。いとあや〳〵ぞあるや。ゝふそれをことゝり。人のふくむをもよしといひ。ほむるをもあしといふハ。心のわどこそおゝたゝらるをゝ。人ふ見えけんぞねさきや。

人なみ〳〵なるべき
やうゐハ、きくゐも
あらじと思ひしゐ
のさま也。
をづ〳〵きなども
ハ、此草紙を見て、清
少納言を心ゐくゝ
恥ゝしき人といふ
人もあきハと也。
それもことゝゝハ、
とうひが〳〵しき心
もおしはゝりしら
れて、恥ゝしといへ
るも道理ぞと也。

標註枕草紙讀本 大尾

明治廿四年九月十日印刷
全　年九月十二日出版

版權所有

標註者　佐々木弘綱　東京神田區小川町一番地
印刷兼發行者　弦巻七十郎　新潟縣下北蒲原郡葛塚町
發賣所　六合館　弦巻書肆　東京麻布南傳馬町二丁目十三番地